
Gemini

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G e m i n i

【Nコード】

N 2 8 6 0 U

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

自分のことを男だと思っている僕の双子の妹、優。

女の子にモテモテのカリスマギタリストだ。

外見だけは全く同じなのに、内気な銀縁メガネの草食系男子の僕、良。

凶暴で身勝手な優に気弱な僕はいつも翻弄されてきた。

ある日、ライブで出会った女の子を好きになってしまった優は、自分の正体を偽る為に僕を身代わりにすることにした。

バレない訳ないだろ・・・？

絡まる恋の行方はどこに行くのか。
禁断の兄妹シリーズ第4弾です。

1話（前書き）

G e m i n i (d ? ? m ? n ? ?) Ⅱ 双子座、双生児、ラテン語で
双子

禁断の兄妹シリーズ第4弾、お楽しみ下さい。

1話

それは友達に連れられて行った、町内の夜店。

こんなチープで意外な所で、あたしは運命の恋に落ちた。

この街に来て、2年が過ぎた梅雨の週末だった。

大学に入学してから、あたしはこの街で一人暮らしを始めた。

古い木造の学生寮は、部屋にトイレはあるもののお風呂は共同で、快適とはいえない。

でも、あたしはこの静かな街が気に入っていた。

運動が苦手なあたしは、合唱クラブに所属して、ピアノの伴奏を担当していた。

歌うことさえ苦手だったからだ。

極度の対人恐怖症に赤面症、特技は引き籠ること。

もちろん、友達なんていなかった。

ましてや恋人なんて、自分には生涯、縁の無い話だと思ってた。

そんなあたしを憐れに思ったのか、数少ない友人があたしを町内の夜店に誘ってくれた。

地元出身で、自宅から通っている彼女はこの街の情報は何でも持っていて、おいしいケーキのお店ができたりすると、いつもあたしを誘ってくれる。

あたしなんか誘って面白いのか分からないけど、彼女の好意には感謝していた。

「美咲ってさ、まだ彼氏いない訳？」

その友人、加藤千春は串に指した鳥のから揚げを齧りながらあたしを振り返って聞いた。

商店街に所狭しと並んだ、露店の中央をあたしがキョロキョロしながら、歩いていった。

綿アメやタコ焼き、イカ焼き、懐かしいB級グルメが軒を連ねて並んでいるのは圧巻だ。

薄暗い外気の中でここだけは煌々と光を放っている。
幻想的でさえあった。

あたしが返事をしないので、千春は頬を膨らませてノロノロ歩いていたあたしの所に戻ってきた。

「もう、人が聞いているのに。こんな、珍しいモンでもないじゃん。」

「あ、そうだね。でも、なんか懐かしくって・・・。」

あたしは少しオドオドしながら笑った。

少し乱暴だけど姉御肌のこの友人が、あたしは好きだった。

「で、さっきの質問だけどさ、彼氏いないの？」

ニヤニヤしながら、千春は同じ質問を繰り返した。

期待に沿えないのが申し訳なくて、あたしは肩をすくめる。

「それがいないんだ。今まで付き合ったことないの。男の子苦手だ

し。」

へええと、面白がって千春は言った。

「かわいいのに勿体無いなあ。あたしの友達、紹介しようか？」
「大丈夫。今のトコ興味ないし・・・。」

それは本当だった。

あたしは目立つことなく一人で静かに生きていくのが人生の目標だったから。

その時。

闇をつんざく物凄いハウリングが響いた。
あたしも、周りにいた人達も思わず、耳を押さえる。

それに続いて激しいドラムの音と、お腹の底に響いてくるベースの音。

コンサートでも始まったみたいだ。

「面白そうじゃん。美咲、見にいこ！」

エネルギーで好奇心旺盛な千春は、あたしの腕をグイと掴んで音のする方向に向って走り出した。

露店が並ぶ商店街の終点に小さな公園があった。
音はそこから響いてくる。

若い男女が既に公園を埋め尽くして、音楽に合わせて飛び跳ねている。

激しいロックだ。

聞いた事ない曲だから、このバンドのオリジナルなんだろうか。

あまり興味のあるジャンルではなかったけど、あたしは有無を言わせない千春の迫力に気圧され、飛び跳ねている群集の中に引きずり込まれていく。

公園の中央に即席の櫓が設置されてて、バンドメンバーたちは安定感のないその上で演奏していた。

盆踊りの時に建てられるような、簡単かつチープな代物だ。

彼らがVIP扱いされていないのは一目瞭然だった。

でも。

上手い。

激しくも、全くブレないビート隊にセンターにいるギターボーカルの男の子もいい声している。

茶色のサラサラした髪にスラっとした長身。

端正な顔立ちだ。

ハスキーな高音で英語の発音もバッチリだった。

でもあたしはその男の子の後ろに微動だにせずギターを弾く少年に、目を奪われていた。

男性にしては小柄な感じた。

170cmあるかないか。

細いけど、しっかりした体つきで真っ赤な肩から掛けたエレキギターを軽々操っている。

しかもすごいピッキングだ。

ただ早いんじゃないくて、歌っているような抑揚のあるメロディライ

ン。

顔は・・・。

きれいだ。

こんな綺麗な男の子みたことない。

時々目にかかる長めの前髪を邪魔そうにかきあげる。

切れ長の鋭い目に通った鼻筋の美人顔だ。

ノリにノッてるオーディエンスを気にする風もなく、彼は一心不乱にギターを引く。

あたしは一番前列まで群集を掻き分けて辿り着いた。

櫓の前まで行つて、ギターの男の子がいる目の前で立ち尽くす。

自分の目の前で仁王立ちになつてゐるあたしに気が付いて、彼は首を傾げた。

名前を思い出せない友人だと思つてゐるみたい。

やがて激しい曲が終わつてギターボーカルの茶髪が自己紹介を始めた。

「今夜はお招き頂きまして、ありがとうございます。オレ達は地元
の大学、って言つたらどこだか分かると思うけど、その学生です。
町内会の会長さんの息子がこのドラムのヤツで、今日はなんか余興
するように頼まれてきました。」

聞いていた群集は人情溢れる経緯にどつと笑つた。

その間、あたしは櫓の上のギター少年を真つ直ぐ見詰めていた。
彼もあたしをまっすぐ見詰め返す。
時が止まつたみたいな瞬間だった。

「じゃあ、次の曲行きます！おい！ユウ！何してる？」

あたしと向き合って硬直している男の子にボーカルの人が焦って呼びかける。

その声にはっと我に帰って、彼はギターを持ち直した。

いきなり始まる彼の高速ギター！。

あたしは大音響の中、初めて鼓動の高まりを感じていた。

2話

梅雨はキライだ。

洗濯物がたまってしまう。

この狭いアパートで、干す所もないのに。

明日、何を着ていけばいいのか・・・？

時計は11時を回っている。

ぼくはこんなくたらないことを悩みながら、たまった洗濯物をどこに干そうか試行錯誤していた。

大学生になってから、ぼくは親元を離れてこのアパートに住み始めた。

大学から自転車ですぐ15分くらいの学生専用アパートだ。

自由を満喫できる一方で、掃除、洗濯、勉強の合間に何でも自分でやらなければならない。

が、草食系で女子力が強い僕には大した仕事ではなかった。

実家にいた時から、家事全般は僕は寧ろ好き好んでやっていた。

一人だったら、全く問題はなかった。

そう、あの女子力0の同居人さえいなければ・・・。

その時、玄関のドアがバーンと音を立てて乱暴に開かれた。

ぼくは洗濯物を両手に持ったまま、その方向を見る。

乱暴に入ってきたのは、ぼくの片割れであり同居人の優^{ゆう}だった。

「あ、おかえり。優。」

「・・・良^{りょう}まだ、起きてたのか？」

優は手に持っていたギターのケースを床に下ろし、玄関に座り込んでブーツを脱いでいる。

やがて、腕を頭の後ろに組んで、伸びをしながら部屋に入ってきた。

ベルトで押さえてある破れたジーンズにダブダブの黒いＴシャツ。

汗で濡れた前髪長めの茶髪。

ファッションセンスは違うけど、その姿は僕そのものだ。

不思議なことはない。

僕たちは双子だったから。

「ライブ、どうだった？」

洗濯物を干しながら聞く僕を振り返りもせず、優は面倒くさそうに返事をする。

「それなりに人来たから、まあまあかな。あんなグラグラしたところでやったの初めてだけど。」

ギターが上手い優はよくこういうイベントに誘われる。

高校から始めたギターが、今では大した腕前なのは僕が一番よく知っている。

それまでは全く音楽に縁がなかった筈だ。

中学校までは二人で一緒に柔道部に入ってたんだから。

「すっげえかわいい女の子がいた。」

突然、優はニヤっとして言った。

「ああ、そう。」

僕は刺激しないように、軽く受け答える。
別に大したことじゃない。

女の子にモテモテの優はライブの度に女の子ファンをゲットしてくるんだから。

同じ外見なのに、地味で内気な僕は彼女もないし、モテたこともない。

突然、部屋の電気が消え、目の前が真っ暗になった。

僕は手に持っていた湿ったシャツを持ったまま。立ち尽くす。

「優？電気消した？」

その質問に答えず、優は部屋の入り口で電気のスイッチに手をかけ突っ立っていた。

暗くなった部屋の中で、月明かりに照らされた優の首から上だけが白く浮き上がる。

「・・・体が熱いんだ・・・。良・・・。」

溜息交じりに優の声がする。

僕はその声にゾクとした。

優はダブダブのＴシャツを優雅な仕草で脱ぎ捨てると、上半身裸でゆっくり僕の方に歩み寄ってくる。

月明かりで、真っ白な細い体が暗闇に浮き上がった。

細いけどしっかりした骨格、うっすらと筋肉のついたしなやかな肢体。

大きめのジーンズをベルトで縛り付けるように、腰ではいている。
それがウエストの細さを強調していた。

ぼくの目の前まで来ると、優はそのしなやかな腕を伸ばし、僕の首

に巻きつける。

僕のほうが2cmくらい大きいものの、ほぼ同じ大きさで同じ顔の優が自分の目の前にいるのは、不思議な感覚だ。鏡を見ているみたいなの、って言ったらいいか。他人が見たら不気味だろうけど。

ぼくと同じ顔で、優はニヤリと笑って舌を出した。悪そうな顔……。

同じ骨格でも、こういう表情は僕にはできない。

「……やらせろよ、良……。」

僕がかけていた銀縁メガネを勝手に外すと、優は僕の頭を抱き寄せ、キスした。

いきなり舌を入れられ、僕は一瞬息が詰まる。

愛とか、優しさとかは全く無縁の、貪るようなキスだ。

己の性欲を満たす事だけに、優の舌は僕の口内を侵略していく。

僕がキスを受け止めている間に、優の手は僕のジャージの上から、固くなってきた部分を掴んだ。その変化を優は楽しんでいる。

「……したいだろ？」

もう、バレてる。

僕は観念して、目を閉じた。

3話

優は乱暴に僕のTシャツの襟首を掴んで、シングルベッドに押し倒した。

そのまま丁度、柔道の締め技の要領で、肘を使って仰向けに倒れた僕の首を押さえる。

呼吸がしにくくなって、僕は咳き込んだ。

そんなことはお構いなしに、優のもう片方の腕は僕のジャージのズボンを引き摺り下ろしていく。

頭わになった僕の下半身に、外の空気が触れて、心もとない。

首を絞め上げ、僕の自由を奪うと優はサディスティックな笑みを浮かべて再び、キス攻撃に出る。

歯がガチガチ当たるような乱暴なキス。

優の舌は僕の口内をこねくり回した後、今度は僕の舌を吸い上げる。頸動脈を押さえつけられた上、口が塞がれて、呼吸ができない。

僕が苦しがる顔を見て、優は更に欲情する。

女の子相手だったら、絶対泣き出すS的性行為。

何で僕はされるがままになってるのかと、時々考える。

好きなんだよな。

優のことが。

反応してきた下半身の上に優は馬乗りになった。

自分のジーンズを素早く脱ぎ捨てると、僕のモノをそれこそ物みたいに握って自分の中に収める。

「う・・・あ！」

思わず、呻く僕を優は上から見下ろし、喘ぎながら笑った。

「お前だけだよ、良。俺の相手してくれるのは。」

それは、そうだろう。

こんなやり方で、誰がお前なんかと付き合うもんか。

優は僕の意向なんか、全く気にすることなく自分の感じるポジションで腰を動かし始めた。

僕は少しでも、優の体温を感じようと、その白い胸に手を伸ばした。その手を素早く払いのけて、優は更に力を込めて僕の頸動脈を締め上げる。

「・・・く、くるし・・・。」

「人の体、勝手に触るんじゃないよ。」

優はすごい目で睨みつける。

僕にはこんなことしといて、何て勝手なヤツだ。
諦めて、僕は抵抗するのをやめた。

やがて、一人で満足した優は僕の上に被さった。

荒い息をして、体を震わせている優の背中を僕はそつと触る。

肉のついてない骨張った硬い背中だ。

正面から裸で見ない限り、優が女の子だって見破る人はいないだろう。

優は肩で息をしながら、僕の上で伸びている優に、ぼくは言いにくい事をオズオズと口にした。

「・・・優。」

「・・・ん？」

「あの、僕はまだなんだけど・・・。」

「知らねえよ。一人で勝手にやったら？」

冷たく言い放つと、優は僕から体を離して、ベッドから降りた。

不完全燃焼のまま、僕は一人で仰向けのままベッドに置き去りにされる。

こっというのが嫌なんだ。

双子の兄の僕のことなんか、性欲のはけ口としか見ていない。

僕は少しイラっとして厭味を言った。

「冷たい女の子は嫌われるぞ。」

その刹那、さつき優が玄関に置いたギターケースが僕の腹の上に振り下ろされた。

木製の四角い箱のギターケースの角が、上手い具合に僕の鳩尾に突き刺さり、思わず呻き声を上げる。

鬼の形相で優は僕の腹の上のギターケースに片足を乗せて、グイグイ踏みつけた。

「てめえ、ケンカ売ってんのかよ？言いたい事はそれだけか、ああ？」

「ごめん、何でもない。」

謝るに限る。

こいつはキレたら理屈が通じる人間じゃないんだから。

優はさっさとTシャツを被り、ジーンズを履いてベルトを締め直す。

ギターケースを掴むと、振り向きざまに言った。

「俺は女じゃない。男でもないけどな。不愉快だから、今日は帰る。」

「

バターン！」と音がして玄関のドアが閉められた。

帰るって、どこにだよ？

一緒にここに住んでるのに・・・。

僕は強姦され、暴行され、放置されたまま、ベッドに仰向けになつて呆然としていた。

あんなヤツでも僕の双子の妹なんだ。

普通の双子と少し違うのは、あいつが自分のことを男だと思っ
てること。

そして僕が高校生の時から、こういう関係が続けていることだった。

4 話

僕の双子の妹は宮崎 優という。

だから、双子の兄の僕は宮崎 良。

二人合わせて優良コンビにしたかった両親はこう命名した。

二人合わさればいいのだが、単体で見ると良より優の方が優れている訳で、僕はこの名前が気に入らない。

しかも、双子とは言え、先に生まれた僕の方が良になってしまったのは、優の響きが女の子らしいからなどと言われても納得できるものではなかった。

もつとも、近所では「宮崎さんちのいじめっ子の方、いじめられっ子の方」で、通っていたけど。

この妹、生まれた時から自分を男だと思っている。

女の子らしい要素をまるで持ち合わせていないのだ。

身長は168cmだから女性としては高い方だ。

胸もお尻も全然なくて、20歳になった今も少年みtainな体型をしている。

同じ顔の僕が言うのも変だけど、なかなかイケメンだ。

シャープな顎のラインに切れ長の二重の目。

通った鼻筋に薄い唇。

ビジュアル系バンドのギタリストに相応しい風貌だ。

僕と決定的に違うのは声と性的特徴だけだろう。

軟弱でも一応男だった僕は声変わりした。

対して、優の声は女の子っぽくもなかったけど、やっぱり男の声ではなかった。

強いて言えば、アニメの少年主人公みたいなキラのある低めの声だ。

優を見てまさか女だとは思わない女の子達が、何度もここまで告白しに来た。

彼女達は、僕らが双子だって知らないから、ダサ過ぎる僕が銀縁メガネでジャージで出ていくと、ガツカリして帰っていく。

失礼な話だ。

基本構造は同じなのに。

優は子供の頃から凶暴で、自分勝手なヤツだった。

いつも男の中に混じって遊んでたし、ケンカも男の子と対等にやっていた。

いじめられっ子だった僕なんかいつも置いてきぼりにされていた。

凶暴な優に礼儀を、軟弱な僕に勇気を与える為、両親は僕らを町の柔道教室に通わせる事にした。

高校まで僕らは一緒に柔道部に入っていたんだ。

その柔道を優が突然辞めたのには訳があった。

中学校になると、女子の中では圧倒的強さだった優も男子には負けるようになった。

男女の力の差が出てくるんだから無理もない。

そんな時、僕が優の相手をしたことがあった。

執拗に足技をかけてくる優を、僕は力任せに顔から投げ飛ばした。

完全に力技だった。

柔道って技が決まれば大して痛みはないのだが、力任せに倒す時は相手が痛い。

顔から畳に投げ飛ばされた優は、鼻血を出して一時退却した。

優が逆襲に来たのは、その晩のことだった。

家中が寝静まった丑三つ時。

僕は首を絞められ、窒息しそうになって目を覚ました。

暗闇の中、何が起こっているのか把握できなくて、僕はただ首に巻きつくその手を必死で外そうともがいた。

その時、闇の中で低い声がした。

「・・・いつからだ？」

「な、何が？優？」

その声は確かに優だった。

僕の問いには答えず、優は更に首を締め付けてくる。

「いつから手加減してた？答えろよ！」

そう言われて、優が今日の柔道のことと反撃に来たんだとやっと分かった。

「て、手加減なんてしてないよ。今日はまぐれだった。」

「嘘つくな！本当はずっと手加減してたんだろ？いつから手え抜いてやってたんだよ？」

「手は抜いてないって。でも、女の子だし、力でねじ伏せるのは反

「則だった。ゴメン。」

「それが、手え抜いてるって言うてんだろ！」

どうしてそこまで怒ってるのか、僕には理解しかねた。

「だけど、僕に力で負けたのが彼女のプライドを傷つけたことだけは分かった。」

「気に入らなかつたら謝るよ。だからこの手を放せって。」

「気に入らねえよ！何でお前みたいのが男なんだよ。俺は頑張ったって、お前に勝てないのに・・・！」

僕の顔にポタポタと熱い液体が落ちてきた。

僕は驚いて、馬乗りになっている優の顔を見上げる。

優は泣いていた。

そして次の瞬間、彼女は信じられない行動に出た。

いきなり僕に抱きつくと、キスしたのだ。

キスを続けながら、僕のパジャマのズボンを引き摺り下ろし、股間に手を這わす。

「・・・！！！」

やめて！と言おうとしたけど、口が塞がれて声が出ない。

やがて準備が整った僕の下半身の上に、優はまたがった。

しばらく僕たちはお互いの同じ顔を見ながら、繋がっていた。

不思議な感覚だった。

生まれる前の状態に帰ったような・・・。

やっと完全体になれたような安堵感さえ感じた。

僕らは激しくなる鼓動を感じながら、お互いの顔を見つめあった。

「・・・お前がキライだよ、良。俺は男になりたかったのに・・・。
お前なんかに負けたくないのに・・・！」

突然、搾り出すような泣き声で優は言った。

でも僕はその時、前から言いたくて言えなかったことを言ってしまったのだ。

「・・・僕はお前が好きだよ。ずっと前から。お前が女で良かった。」

返事の代わりに、優はガバッと起き上がって体を離すとベッドから飛び降りた。

月明かりに照らされた顔が、涙に濡れた目で僕を睨んでるのが見える。

「良、俺は男じゃない。でも、女でもないんだ。女扱いすんな。」

そう言った優の白い顔はすぐ女っぽかった。

僕は、今の優の行動の意味がやっと分かった。

確かに彼女は、今日の逆襲にきたんだ。

そして、それは女の武器を使って大成功を収めた。

その日、僕は童貞を奪われ、優の奴隷になったのだから。

その後、優と柔道をすることはなかった。

彼女は突然、柔道部に退部届けを出し、ギターを始めた。

「音楽は男女の差がないからな。」

優はそう言って、初めて買ってもらったエレキギターを嬉しそうに眺めていた。

16歳の時の話だ。

僕は、あの時から優の虜になったまま、20歳になっていた。

5話

開けっ放しの窓から差し込む朝日で僕は目を覚ました。

昨日の洗濯物の籠が、そのままの状態で窓際に転がっている。
僕は頭を働かせようと、首をグルッと回してみる。

そうだ。

昨日、優と・・・。

そのまま、眠ってしまったみたいだ。
で、あいつはどこ行っただ？

ベッドから降りようとした僕の足に布団に包まれた大きな物体がひっかかった。

躓いた僕はその物体の上に倒れ込む。

「・・・つてえなあ・・・。」

布団の中から、不機嫌な声がした。
優だ。

僕は少しホッとして布団をめくってみる。

布団の中には昨日と同じＴシャツで、冬眠中のリスみたいに丸まっている優がいた。

「何だよ。結局ここで寝たのか？」

僕の質問に優は目も開けずにボソボソ返事をした。

「ちょっとだけ、出かけた。コンビニで酒買って……。そしたら、酒とギターで重くて歩けなくなって、それで帰ってきた……。」

言われて見ると、流し台にビールの缶が5、6本転がっている。なるほど。

その歩きにくいほど重いギターケースを人の腹に叩き付けたのは覚えてないだろうけど。

僕は苦笑して、僕と同じ寝顔を見つめる。

「声かけてくれたら、付き合ってた飲んでやったのに。」

「よく寝てたじゃん。それにお前はキライだ。」

優はふてくされたように吐き捨てた。

そのキライな相手とあんなことした後、寄り添って寝てるんだから、優の思考回路は理解できない。

確かに男でもないけど、女でもないんだ。

TVでよくやってる性同一性障害とも違う気がする。

本当のことは、優にしか分からないんだろうけど。

僕はメガネをかけて、床に落ちてたジャージのズボンに足を通した。

外は初夏の日差しで、眩しいくらいだ。

梅雨の合間の晴天。

今日は日曜だし、洗濯もできそうだった。

「優、なんか食べる？朝ご飯作るけど。」

天気がいいだけで機嫌が良くなって、僕は優に問いかける。

完全夜型人間の優は面倒くさそうに、片目を開けた。

「・・・ベーコンエッグ、作って・・・。」

カフェオレとリクエストのベーコンエッグ、僕のお気に入りのベーカーリーで買ったホテル仕様の食パン、輸入品店で買ったブルーベリージャム。

我ながら新婚さんの朝ご飯みたいなメニューを、キッチンの小さな折り畳みテーブルに並べた。

準備が全部整った頃を見計らって、優はクシャクシャになった髪をかき上げながら、ノロノロやってきて椅子に座った。

筋肉質の細い足が大きいTシャツからだらしなく伸びている。

自分で言うのもヘンだけど、外見は僕そのものだ。

女性ホルモンが働いた形跡は見当たらない。

まじまじと見ている僕に気付いて優がガンつける。

「何見てんだよ？」

「・・・別に。似てるなって思ってたさ。」

「バーカ！お前と一緒にすんな。」

「そのバカの作った朝ご飯だ。嫌なら食うなよ。」

最後の僕の言葉に優はグッと言葉に詰まる。

「・・・嫌じゃないよ。お前の料理、うまいから・・・。」

僕らは小さなテーブルに僕らは向かい合って食べ始めた。

最近、こんな些細な口論が多くなっていた。

僕が優を求めるほど、優は僕をキライになっていく。

自分の欲しかった男性の体を活用しないまま、グズグズしている僕に苛立ちを感じているのは分かっていた。

「今日、夕ご飯は？ここで食べる？」

沈黙に耐えられず、僕が口火を切った。

優は人の目も見ないまま、サラッと返事をした。

「いい。昨日と同じトコで今夜もう一回やることになってるんだ。多分、メンバーと打ち上げするから。」

会話はそこで途切れた。

僕は黙ってコーヒーに口をつける。

再び、沈黙が続いた。

優は静かになった僕の反応を見て、少し動揺を見せた。

ホラ、見る。

典型的猫型人間め。

追えば逃げるけど、逃げれば追ってくる。

生まれる前からの付き合いだから、僕も勝手が分かっていた。

「良、何か言えよ。」

気まずそうにボソつと言った優を、僕は少し優越感を持って眺めた。

「何をだよ？」

「・・・何でもいいよ。」

「無理矢理やられたこととか、ギターケースで腹を足蹴にされたこととか、暴行された後、放置されたこととか、メシ作ったのにバカって言われたこととか、か？」

「・・・ごめん。」

やった！

謝らせた。

少し反省の色を見せた優が、なんだかかわいくて僕は笑った。そして、突然思い立ったって、僕は優に言った。

「ねえ、優。今夜の夜店ライブ、僕も見に行つていいかな？」

突然の提案に、優はギョっとして顔を上げた。

「別にいいけど・・・マジ？ロックだよ？」

「僕がロック聴いたらヘンか？」

逆に質問してやると、優は言い難そうに口籠る。

「ヘンじゃねえけど・・・、浮くよ？俺の兄貴だって分かったら恥ずかしいじゃん。」

随分、失礼なヤツだ。

同じ顔してるクセして。

「いいよ。兄貴だって分からないように、いつもより更にダサイ格好で行けばいいんだろ？大丈夫。お前が女に見えないくらい、僕は兄には見えないよ。裸で並ばない限りね。」

梅雨の合間の初夏の夜。

運命の歯車が動き出したことには、まだ気付いていなかった。

6話

「夜店が出始めるのは6時くらいから。ライブは商店街出たこの公園で7時から。どこで見ててもいいけど、俺の兄貴だって分かんないようにして来いよ。」

僕が一日洗濯に追われて、乾いたものを取り込み始めた夕方、優はそっぴい残し出て行った。

ボタンと締められた玄関のドアを見つめて、僕は溜息をつく。

僕が兄貴じゃ、そんなに恥ずかしいのか。

同じ顔してんのに、失礼なヤツめ。

ブツブツ毒づきながらも、彼女の言わんとすることは理解できた。

僕はダサイんだ。

そんなことは言われなくても分かっている。

ビジュアル系ギタリストの路線でいってる優には僕のダサイ私服が許せないに違いない。

いいさ。

敢えてそれで行ってやる。

僕は髪を七三分けしてワックスで固めた。

昔使ってた、黒ブチの大きなメガネを銀縁の代わりにかけてみる。

白地に青いボーダーのポロシャツにジーンズ。

もちろん、シャツはズボンの中に入れてベルトをした。

鏡を見て僕は満足した。

昭和の香りがする非モテ男子だ。

カリスマギタリストの双子の兄には見えまい。

夕闇が広がり始めて、少し夜風が出てきた頃、僕は商店街に向ってアパートを出た。

この街に来て2年目になる。

二人で同じ国立大学にすれば下宿させてくれるという両親の提案を僕は受け入れた。

同じ学生アパートに住めば、かなり出費が浮くからだ。

得意教科も同じだった僕らは一緒に進学する為に必死で受験勉強をしたものだ。

優が言ってた商店街の夜店はすぐに分かった。

薄暗くなった街の中に、露店が並んだその通りだけはボンヤリと薄明るかった。

僕はイチゴのかき氷を買って、ストローで吸いながら商店街を歩き回った。

よく見ると、ハデな衣装を着た学生風の若者が多い。

もしかして、みんな夜店ライブが始まるのを待ってんのか？

音楽なんて全然聴かない僕は、当然ライブなんて行った事も無く、場違いな所に来た気がして少し気後れした。

商店街を抜けると既に人だかりができた小さな公園が見えた。

さっきまで僕の周りでウロウロしていた若者達もいつの間にかこっ

ちに移動している。

やっぱり、これ皆、夜店ライブに来た人達なんだ。

こんなに沢山の人の前でよくギターなんか弾けるものだ。

学芸会も大嫌いだった僕は、それを思い出し鳥肌が立った。

茶色の縦ロールの髪がゴージャスな黒いレースのミニスカートに網タイツの女の子集団が僕の後ろをキンキンした声で話しながら、歩いていく。

その声は何の気なしに前を歩く僕の耳に入ってきた。

「でね、ライブの後、ユウをつけてアパートまで行ったのよ。」

「えー！ユウのアパートってどこ？」

「それが、大学の近くの普通の貧乏学生アパートだったの。で、ノックしたらユウが私服で出てきたのよ。」

「キヤー！マジ？それで？」

「でもユウったら私服がメチャダサで、あたしがっかりして帰っちゃったの。だって銀メガネにジャージだよ。ガンダムが胸にプリントしてあるトレーナーなんだって。」

「やだー！ガンダム？ユウってそういう人？」

聞いていて、胸が痛くなつて僕はその場を離れた。

間違いない。

それは僕だ。

でも、ガンダムじゃなくてエヴァンゲリオンだよ……。

もちろん、それを口に出す元気もなかったので、僕は速やかに立ち去った。

その時。

キー……ンという物凄いハウリングが響いた。

僕はびつくりして、耳を押さえてキョロキョロする。

対照的に、周りにいた人達は歓声を上げて、公園の中に駆け込んでいく。

どうやら、これが始まりの合図らしい。

・・・うるさいじゃないか。

先行き不安になりながら、僕は群集の中に入って行った。

一人だけだと、何とか前に進めるものだ。

やがて、盆踊りの時にスピーカーや太鼓なんかを載せるような櫓が見えた。

その上に、ギターを持ったボーカル、ベース、ドラム、そして、いつもの真つ赤なギターを抱えた優が立っている。

優は割りと後ろのポジションにいた。

あいつはジャンプしたり、歯で弾いたり、ダイブしたりしないのかな？

ステレオタイプのロックギタリストのイメージしかない僕は、そんなことを真面目に考えた。

「皆さん！今夜もお招き頂きましてありがとうございます！地元大学の学生バンドです。」

スラリとした長身の茶髪のボーカルがマイクを持って挨拶した。

周りにいた女の子達がキヤーキヤー歓声を上げる。
なんか分かる。

この人はきつとモテ男だ。

「まずは景気付けに激しめヤツ、いきます。オリジナルです。曲は
TABOO！」

歓声とともに、すごい騒音が響いた。

激しいドラムと腹にズンズン響くベース。

そして。

真つ赤なギターを自在に操る優が奏でる、闇夜を引き裂くようなメロディライン。

ギターが泣くってこういうことか。

僕は興味を持ちながらも騒音に耐えられず耳を塞いだ。

ステージでギターを弾く優を僕は羨望の眼差しで見つめた。

確かに、大したもんだ。

これなら男に全く引けを取らない。

もつと言え、ステージの優は女には絶対見えない。

きつとすごく頑張ったんだろうな。

男に負けないように。

ぼくはもう少し前に出ようと、飛び跳ねている群集の隙間を縫うように前進していく。

そこで僕は、気が付いた。

最前列の更に一步前に出たところに女の子が立っている。

優がギターを弾いているその真ん前だ。

他の人間が激しいリズムに合わせてジャンプしているのに、彼女だけは人形のように固まったまま優を凝視している。

僕にはすぐ分かった。

この子が優が言っていた「すっげえかわいい子」なんだって。

7話

飛び跳ねる人の群れの間を通過して、その少女が立っている2列ほど後ろにきた。

突っ立っていると逆に目だってしまうので、取り合えず周りに合わせてジャンプしてみる。

リズム感のない僕は皆より1テンポ遅れて着地するので、邪魔にされる事この上ない。

少女はジャンプしている周りの群集には目もくれず、優だけを真剣な眼差しで見つめていた。

僕の所からは、横顔しか見えなかったけど、確かにかわいい。

小柄な女の子だ。

柔らかそうなピンク色の肌がワンピースの襟元から見える。

さらさらの黒髪を大きな髪飾りで頭の後ろにまとめている。

丸い顔の輪郭に、大きなぱっちりした黒い瞳。

小さな鼻にぽつりしたピンクの唇。

まだ、思春期の高校生みたいだ。

優ってこういう子がタイプなんだ・・・。

でもアイツが好きになるのは、やっぱり女の子なのか？

僕は複雑な思いでその幼い横顔を観察していた。

僕は優が好きだった。

あんなヤツだけど、女の子として好きなんだ。

でも、あいつが男として女の子が好きなら、僕の思いはどこにいけばいいんだろう？

やがて、櫓の上でギターを弾いてる優が彼女に気付いた。

ピッキングを全く乱すことなく、櫓の縁まで出てくる。

周りの女の子達が歓声を上げた。

近くで見る優は、本当にかっこいい。

ギターを見つめる鋭い切れ長の目。

クールなのに熱い表情。

長めの前髪をかきあげると、女の子達が悲鳴を上げる。

やっぱり、僕とは違う人種だ。

外見が同じでも、僕らには決定的に違う何かがある。

人はそれをカリスマって言うんだろう。

僕は、ステージで輝いている優が羨ましかった。

やがて、激しめの一曲目、TABOOが終わった。

「ありがとうございます！では、ここでメンバー紹介をします。まず、ドラムのショータ。こいつのお父さんがこの商店街の自治会長さんで、このイベントのスポンサーです・・・。」

茶髪のギターボーカルが紹介を始めたその間に、優は櫓からギターを抱えたままピョンと飛び降りた。

一瞬、僕の周りの女の子集団がざわめく。

優は素早く少女の前に駆け寄ると、その手に何かを握らせた。

少女は驚いた顔で、優を見つめる。

終始無言で、優は再び櫓によじ登ると、何事もなかったかのように同じ位置に戻ってギターを構えた。

少女は手を握り締めると、群集を掻き分けて後ろに下がった。
そしてそのまま、姿を消した。

僕と、近くにいた一部の女の子達は啞然として、それを見つめていた。

1時間ほどでライブは終わった。

一応メンバーの関係者である僕は、バンドメンバーの控え室ならぬ、公園のトイレ前に呼ばれた。

トイレの手洗い場では、町内会自治会長の息子のドラムの人が、上半身裸でバシャバシャと豪快に頭を洗っている。

さっきの輝いていたステージから一転、男臭いすごい光景だ。

ブランコに座ってタバコをふかしていたさっきの茶髪のもて男が、近づいてきた僕に気が付いて手を振った。

「どーも。ユウのお兄さんなんだってね。初めまして。」

人懐っこい笑顔だ。

僕も思わず会釈を返す。

近くで見ると、本当にかっこいい。

「おい！良！帰るぞ！」

アニメの少年主人公みたいな、よく響く声が僕を呼んだ。

トイレの裏から、いつものダブダブTシャツを着た優がギターケースを担いで歩いてくる。

「何だよ、ユウ。打ち上げかないのか？お兄ちゃんも来ていいのに。」

茶髪は気を利かせて言ってくれたが、優は黙って首を振った。

「すみません、圭介さん。ちょっと、ヤボ用ができたんで。またラ
イブで。」

「あつそ。それは残念。ま、また連絡するよ。じゃあな、お兄ちゃ
ん。」

茶髪はタバコを啜えて、僕にウィンクしてみせた。

「早くアパート帰るぞ、良！」

僕にギターケースの片側を持たせ、もう片側を優が後ろ向きに持つ
て、ぼくらはまるで「オサルの籠や」みたいな格好でえっさえっさ
と歩いていた。

「打ち上げ行くから晩御飯いらないんじゃないかなかったのか？」

僕は優の背中に向って怒鳴る。

「それどこじゃねえよ！早くアパートに帰らないとまずいんだよ。」

首だけ僕を振り返って、優は怒鳴り返した。

「何だよ、それ？アパートに何かあるのか？」

優は振り向いて、ニヤリと笑った。

あ、いつもの悪そうな顔だ。

「かかってくるんだよ、電話が。」

少し弾んだ声で、優は言った。

「誰から？」

「決まってるだろ？女だよ。」

女・・・？

僕は、はっと思い当たって眉間に皺を寄せた。

「まさか、さっきの女の子か？」

「そうだよ、ギターのピックに10時にTELしろって書いて渡し
たんだ。だから、それまでにアパート帰らないと。」

僕はやっと理解した。

そういうことか。

「電話させてどうすんだよ。あの女の子と付き合うのか？」

「まだ、わかんねえよ。それより電話かかってきたら、良、お前が
出るよ。」

・・・何で、僕が？

言ってる事が把握できずに、僕は首を傾げる。

「何で、僕が出るんだよ。お前が誘った女の子だろ？」

「だから、さ。俺が女だってバレたらまずいだろ？外見では分かん
なくても、電話だったら声でバレるからな。お前なら、男の声出る
じゃん。」

おかしい。

その考え方、何かおかしいぞ。

「女だって隠して付き合っってこと？」

「だから、まだわかんねえって。グダグダ言ってねえで、さっさと歩け！」

僕は釈然としないまま、優の背中を見ながら歩き続けた。

8話

アパートに戻って、僕はまず、熱の籠った部屋の窓を開けた。

が、外気も湿気が多くて蒸し暑く、開けたところで大差はなかった。

人ゴミの中でジャンプした後、ギターを担いで歩かされて、僕は汗と埃でベタベタになっていた。

シャワーを浴びようとユニットバスのドアノブを掴んだところで、先客がさっぱりした顔で出てきた。

何も纏っていない優の全身と鉢合わせした僕は、目のやり場に困って慌てて下を向く。

本当に女なんだ、優は。

全然膨らみのない胸や、筋張った筋肉質の手足はともかく、僕とは全く違う形状の下半身はごまかしようがない。だって、ないんだから。

僕の赤面した顔に気が付いた優は、またあの悪そうな顔でニヤッと笑った。

「何だよ、見たいのか？」

「み、見たくないよ！てか、パンツくらい履いて出て来いよ。」

「今更、隠したってしょうがねえだろ。俺が女だって知ってるくせに。」

ハハハと男らしく笑って優はバスタオルを被った。

そうだ。

僕はお前が女だって知ってる。

だからこそパンツを履いて欲しいのに、その考え方は間違ってる。

悶々としながらシャワーを浴びて、僕はちゃんとパンツを履いてから外に出た。

優は既に短パンとＴシャツを着て、床に座り込んで缶ビールを飲んでいる。

僕は、優の前に座って、開けてない缶ビールを一本手に取った。

汗で水分を奪われた喉に、冷たいビールが流れ込んでいく。

生きてて良かった瞬間だ。

「良、もうすぐ１０時だ。電話がかかってきたら、お前が優だって言っただ話しろよ。」

優はビールをゴクゴク飲んで、手の甲で口の周りをグイと拭う。

こんな仕草が自然に男らしい。

こいつが本当は男なのか、女なのか僕には分からなかった。

「僕が出てどうするんだよ？」

「取り合えず、デートの約束してくれ。」

「デートしたら、そこで女だってバレるだろ？」

「バレねえよ。性交渉するまではな。」

少し酔いの回った顔で優は笑った。

こんな表情は女っぽい。

こいつの体の中で二つの人格が出たり引っ込んだりしてる感じた。

僕は質問を続ける。

今まで、何となく突っ込んで聞けなかった優の性について、今なら答えてくれる気がした。

「優は女の子が好きなのか？」

「多分ね。好きになるのは大抵かわいい女の子だよ。」

ビールの缶をユラユラ振りながら、意外にもあっさり答えてくれた。今日は機嫌がいいらしい。

僕は更に突っ込んでみる。

「・・・お前、女の子としたことあるの？」

「ないよ。キスまで。女だってバレたところで、いつも逃げられるからな。」

「じゃ、男とはしたことあるの？」

「お前以外の男とはないよ。俺はゲイじゃないし。」

あれ？

・・・今、ヘンな事言わなかったか？

「どついう意味だよ？」

優はニヤニヤして缶の縁を舌で舐める。

「男に興味がないんだ、俺。ヤルなら絶対女の子がいい。でも、良は特別なんだ。女役に徹してくれるからな。お前とするのは好きなんだよ、これでも。」

何だよ、それ？

褒められてるのが貶されてるのか、僕は判断に苦しんだ。

「でも、女の子とどうやってヤルんだよ？・・・その、物理的に難しいだろ？」

僕の質問に優は真剣な顔になって考え込む。

「それをいつも悩んでるんだ。テクだけじゃ女って満足しないのかな？」

真面目にそんなこと僕に聞かれても、優以外に経験の無い僕が分かる訳ない。

「お前はどんなんだよ？体は女なんだろ？」

「俺？・・・満足しないな。俺は無理。」

「じゃあ、どうするんだよ？」

「・・・通販で玩具を買うとか・・・？」

酔いに任せて、僕らは禁断の領域について真剣に議論し続けた。

その時。

ルルル・・・と壁に掛かっている電話から着信音がした。

僕らは電話を見つめて、硬直する。

時計を見ると、ジャスト10時だ。

彼女に間違いない。

はじかれた様に立ち上がると、優は足で僕の膝を蹴った。

「おい！早く出るよ！宮崎 優ですって言えよ。」

酔いが回ってる上に、胡坐をかいてたせいで体が動かない。

優に蹴られながら、僕はよろめき何とか立ち上がった。

受話器を取って、耳に当てる。

やや沈黙があった後、小さなかわいい声がした。

「・・・あの。ユウさんですか？」

うわあ・・・。

これが本物の女の子の声だ。

僕のテンションは自然に上がった。

「はい、そうです。僕が宮崎 優ですよ。こんばんわ。」

そこまで言ったところで、僕のお尻に優の蹴りが入った。

「痛つたいな、何すんだよ。」

お尻を押さえて振り向くと、口をパクパクさせて、優が顔を真っ赤にして怒っている。

僕が理解できないでいると、優はノートに殴り書きして僕に見せた。

「バカヤロー、俺っぽくクールにしゃべれよ！」

そんな、無茶な。

僕が平成のダサ男だつて知ってるくせに。

黙ってたなら、彼女の方から話しかけてきた。

「あの・・・ピック貰ってすごく嬉しかったです・・・。あたし、里中美咲っていいいます。地元大学の2回生です。」

え、高校生じゃないんだ。

僕は少しびつくりした。
しかも同じ大学の同級生だ。

「そうなんだ。僕もね、2回生だよ。文学部英文科。君は？」

テンションが高くなった僕のお尻に再び蹴りが入る。

優がノートに書かれた新たな殴り書きを指差して、口をパクパクさせている。

「くだらねえこと言ってんじゃないよ。今度どっかいかねえってきけ！」

僕は優にあっかんべーをして再び、受話器を握り締める。

今は僕に主導権がある。

悔しかったら男の声で喋ってみろ。

「あのー、良かったら僕とデートしませんか？動物園とか、映画とか。例えば、明日の日曜日とかどうです？」

電話の向こうで息を飲む気配がした。

「・・・はい。行きます。明日ですね。嬉しい・・・！場所は・・・？」

交渉成立。

僕は優に向って親指をぐっと立てて見せた。

9 話

「成功だ。明日朝、11時に駅前のマクドナルドに集合。映画でも見て来いよ。里中美咲ちゃんって言っただって。」

僕は得意げにメモ書きを優に手渡した。

優はまだ酔いの冷めない赤い顔で、紙を受け取る。
冴えない顔だ。

「何だよ、嬉しくないのか？向こうもすごく喜んでるよ。」

「・・・嬉しいけど・・・怖い。」

神妙な顔で優はボソッと言った。

さっきまで、大衆の目前で派手なギターを弾いてた優とは別人みたいな、弱気な表情。

もっと言え、女っぽい顔をしている。

「怖いって何で？性交渉するまではバレないんだろ？」

「・・・見極めが難しいんだよ。俺、これでも何度もフラれてんだから。」

髪をかきあげて、優は自嘲的な笑みを見せた。

「最初は、どの子もノリノリで来るんだ。俺もキスまではするよ。でも、その後は絶対バレちゃうだろ？俺だけ脱がない訳にもいかないし。だから、そこでカミングアウトするんだ。実は女だけいいかな？って。」

僕は優の話を黙って聞いていた。
イケメンなら苦労は無いという訳ではないらしい。

「で、そこでフラれるのか？」

「フラれると言うより、逃げられるね。あたし、そういう趣味ありませんって。傷つくよ、結構。」

優は次のビールを掴むと、グイッと開けた。

赤くなった顔が少し子供の頃の面影があつて、僕はせつなくなった。このややこしい性格のせいで、人に言えない悩みとか、辛いこととか、一杯抱えてきたんだろうな。

できることなら、僕の体と交換してやりたい。

軟弱な僕としても、その方が楽な人生を送れた筈だ。

僕らは生まれる時、入る体を間違えてしまったに違いない。

優はビールを飲みながら話し続ける。

アルコールのせいでもいつもより饒舌になっていた。

「あの子は、そういう女どもと、ちょっと違う気がしたんだ。直感だけ。もしかしたら、俺の体じゃなくて精神的な部分を見て好きになってくれるかもって。俺はいつかそういう女の子が、現れるんじゃないかと期待してるんだ。」

「・・・それって、レズビアンとか、そういう類の女の子になっちゃうのかな・・・？」

僕は再び考える。

もう、経験値の低い僕には未知の領域だ。

僕的那言葉に、優は真面目な顔で僕を見上げた。

「良、いつも言ってるけど、俺は男じゃないし、女でもない。俺は俺だよ。子供の頃から親とか先生とかに何度も精神科に連れて行かれそうになったけど、俺は病気じゃない。性ナント力障害でもない。多重人格でもない。俺はこういう人間なんだ。それだけじゃ、ダメか？」

「・・・いや、ダメじゃないよ。」

「俺を好きになってくれる女の子は、結果的にそう呼ばれる人かもしれない。でも、何でもいいんだ。俺のこと見てくれるなら。」

僕は、珍しく心の内を語る優をただ見つめていた。
初めて見た優の一面。

凶暴で、自分勝手な僕の妹にこんなデリケートな一面があったなんて。

生まれる前から一緒にいたなんて、僕は一体何見てたんだろう。

マイノリティな人間の孤独を分かち合える女の子を、優はずっと求めているんだ。

でも。

「それは僕じゃ、ダメなの？」

思わず口に出た僕の言葉に、優は顔を上げる。

「いつも言ってるだろ？僕はお前が好きだって。お前の本質を好きになる相手は僕じゃダメか？」

アルコールのせいかもしれない。

僕は少し感情的な口調で言った。

「良は双子の兄さんだろ？それはまずいよ。」

「まずいって、じゃあ、お前がいつもやってる強姦プレイは何だよ。同性愛ならまずくないのか？」

「・・・そうだな。どっちもノーマルじゃないね。」

優はハハハと笑った。

僕のことなんか、まるで人事だ。

その笑顔に、僕はムキになってのがバカバカしくなる。

「・・・もういいよ。でも、覚えとけよ。僕はお前が好きなんだから。悩みがあつたら何でも言つて。」

「ああ、ありがとう。そうするよ、お兄ちゃん。」

優は笑つて、乾杯するようにビールの缶を僕に掲げてみせる。

僕も何だか気が抜けて、缶を優の持つてる缶にコツンと合わせた。

「で、相談なんだけどさ、お兄ちゃん。」

優は再び、悪そうな顔でニヤッと笑った。

嫌な予感がして、僕はビールを飲む手を止める。

「何？」

「明日のデート、お前が行ってくれないかな？どんな子か、お前が最初に見て、打診して欲しいんだ。もしかして逃げちゃうタイプの女だったら、俺、また傷つくの辛いんだよ。」

酔いの回った顔で、優は目を潤ませて上目使いに僕を見る。

こういう時は女なんだ。

こいつは武器を使い分けることを、子供の頃から知っている。

さっきの話を聞いたあとで、僕が断わることはできなかった。

「分かったよ。僕が行くよ。でも、最初だけだからな。」

10話

日曜日、朝11時。

いいお天気だった。

交通量も人も増えてきて、駅前には活気に溢れている。

昨日の夜、電話でユウさんに言われた通り、あたしは駅前のマクドナルドの前に立っていた。

今から、胸がドキドキしてる。

本人に会ったら、倒れちゃうんじゃないかしら。

赤面症のあたしは、すでに真っ赤に火照った顔を手でパタパタ仰いだ。

昨日のライブでユウさんに手渡されたピックを、あたしはまた握り締める。

P M 10 : 00

T E L x x - x x x x

ユウ

真っ白な涙型のピックには、それだけがマジックで書かれていた。
嬉しかった。

初日のライブでは全然動かなかったユウさんは、昨日はあたしの目の前まで来て、パフォーマンスしてくれた。

そして、突然あたしの元に降り立って、これを渡してくれたんだ。
シンデレラにでもなった気分だった。

千春に連れて行かれた夜店ライブで、あたしはユウさんを初めて見た。

内気で消極的なあたしが、追っかけまがいのことをするのは初めてだった。

自分でも驚きだったが、あたしはその時から恋をしてしまったのだ。
次の日も夜店ライブをやるという予定を町内会のチラシを見て、再び、あたしはあの公園を訪れた。

それが、昨日の夜の事だった。

でも、だからと言って、話しかける勇氣も行動を起こす度胸もなかった。

ただあたしは、彼のギターを見つめる鋭い瞳を見ることができれば、それで良かったのに。

それが、まさかデートして貰えるなんて・・・！

どうしよう、あたし。

人馴れしてないあたしは、口下手で決して一緒にいて楽しい人間ではないだろう。

つまらないヤツだって思われたらどうしよう。

昨日の電話で話しをした時、ユウさんは見かけによらず、意外に朗らかな感じがした。

もっと怖い人かと思ったのに。

男性にしては高めの声だった。

でも、よく通るいい声だ。

彼の声を今日は間近で聞ける幸せを思い、再び、鼓動が激しくなる。

あたしはもう一度、マクドナルドの大きなガラスの自動ドアに自分の姿を写してチェックする。

レトロな青い縦ストライプのワンピース。
白いサンダル。

今日は髪を下ろしてカチューシャをしてみた。
ちよつと乙女チック過ぎるかしら。

あたしの姿が映ったガラスにもう一人男の子の姿が映った。
その男の子の手がバイバイするように横に振られて、あたしは慌てて振り返る。

大きめの黒いＴシャツに、腰より低い位置で履いた大きめジーンズにスニーカー。

キャップを後ろ向きに被って、ポケットに両手を突っ込んだその姿は少年みたい。

彼は、少し照れたようににっこり笑って言った。

「あの、里中美咲さんですよ？僕は宮崎優です。昨日は電話ありがとうございました。」

あたしは顔を真っ赤にして、その場で硬直した。
ユウさんだ。

昨日の電話と同じ優しい声・・・！

固まってしまったあたしを見て、ユウさんは笑った。
明るい、かわいい笑顔だ。

昨日のギターを弾いてた鋭い目のクールな彼と、目の前でニコニコしている彼は、別人みたいだった。

ユウさんは、あたしに近づき背中をポンポン叩いてくれた。

「大丈夫？緊張しなくていいよ。実は僕も緊張してるんだから。お互い、気楽に話しよう、ね？」

「は、はい・・・！ありがとうございます。」

ああ、何て気さくな人だろう。

あたしのことをこんなに気遣ってくれるなんて。感極まって、あたしは泣きそうだった。

「美咲ちゃん・・・って呼んでいいのかな？お昼には少し早いけど、せっかくマクド前だし、コーヒーでもどう？少し話しようよ。」

「あ、はい！でも、あたしの話、きっと面白くないと思います。あたし、内向的で口下手なんです・・・。」

それだけは先に言っておきたかった。

あたしは暗い女なんだ。

後からがっかりされるのだけは、悲しくて立ち直れそうもない気がした。

それを聞いて、ユウさんはびっくりしたように切れ長の涼しい目を大きく見開いた。

長い睫毛がちょっと色っぽい。

中性的な感じだけど、チビのあたしよりはずっと大きかった。

「そうなんだ！気が合いそうだね。僕も子供の頃は苛められっ子で、今も友達あんまりいないんだよ！」

ユウさんはすごく嬉しそうに顔を輝かせて、あたしの両手を握ってブンブン振った。

まるで、砂漠の中で仲間を見つけたみたい感激ぶりだ。

「ますます美咲ちゃんと話したいな。さ、マクド入ろう！」

ユウさんはあたしの背中をぐいぐい押して、店の中に入っていく。

人は見かけによらないものだ。

カリスマギタリストのユウさんが元苛められっ子で、友達いないなんて。

しかも、テンション高くて、朗らかなキャラだ。

ちよつと天然な感じだし・・・。

あたしはライブの時とは違う一面を持つユウさんをますます好きになっただ。

11話

入り口のカウンターでユウさんは二人分のコーヒーとポテトを頼んで、窓際の椅子が二つ並んだ小さなテーブルを陣取った。

その小さなテーブルに、あたしは彼の目の前に向き合って座った。テーブルの幅、約50cm。

こんな至近距離に、ユウさんの笑顔がある。

あたしは感激を通り越して、呆然としていた。

「美咲ちゃん？ コーヒー冷めるよ。そんなに緊張しなくていいから。」

ニコニコ笑みを絶やさず、ユウさんはあたしを気遣って話しかけてくれる。

気の利いた対応ができないあたしは、何だか申し訳なかった。

「・・・ごめんなさい。あたし、夢みたいで、すごく嬉しくって・・・。今日は本当にありがとうございます。」

「そんな、大袈裟だなあ。誘ったのは僕なんだから。いつもライブ来てくれるの?」

ユウさんはニコニコしながら頬杖をついてあたしを見つめる。

長い睫毛の下の、黒い瞳。

そこに鈍臭いあたしは、どんな風に写ってるんだろう。

「すいません。ライブ見たのは一昨日が初めてです。あたし、その時、最前列で見てたんです。ユウさんもあたしのこと見てくれましたよね?」

「あ、え?一昨日から来てるの?」

ユウさんは急に動揺してコーヒーをむせ込んだ。
そうだ。

あたしは、確かに一昨日のライブで、彼の視線を感じていた。
それで、彼はギターの出だしを外してしまったんだから。

「そ、そうだね。あの時、いたよね。そういえば。で、また来てくれただね。」

笑いを絶やさないように、彼は慌てて言った。

「はい！あたし、ユウさんのギター、本当に感動しました。ギターが泣き叫ぶような、すごい迫力でした。あたし、ピアノやってるんです。是非、一度セッションしませんか？」

「ええっ？僕がギターでセッション？あー・・・考えとくね。」

あれ？

あたしの渾身のお願いが、案外あっさりスルーされた。
ピアノとハードロックは合わないと思われちゃったかな・・・
へんなこと、言っちゃった。

「ああ、美咲ちゃん。大丈夫だよ。僕ならいつでも弾くから。でも、今日はギター持ってないからね。」

しょんぼりしたあたしの機嫌を直そうと、ユウさんは慌てて言った。
・・・優しい。

クールなギタリストは、本当は感情豊かな温かい人なんだ。
あたしは彼の気遣う心が嬉しかった。

あたし達はコーヒーを飲み終えた後、街をゆっくり歩き回った。初夏の日差しが強くなってきて、梅雨の気配は既に無い。

「もう夏だね。美咲ちゃんは海とか行くの？」

歩道側のあたしの横を並んで歩きながら、ユウさんは聞いた。

「あ、全然です。あたしも、友達あんまりいないし、泳げないし。」

「あー！僕も。一緒に行く友達がいないんだよね。今度一緒に行く？」

・・・今、何て？

あたしは耳を疑った。

ユウさんがあたしを海に誘ってくれるの？

「それって・・・次のデートの予約ですか？」

「え？まあ、そんなところかな。」

ユウさんは急に言葉に詰まって、顔を赤くした。どうしよう・・・。

あたしは嬉しくて泣きそうになった。

「はい！あたし、水着買って待ってます。お弁当も作ります。」

「はは・・・大袈裟だなあ。でも、美咲ちゃんの水着姿みたいなの・・・」

ユウさんは赤くなって、慌てて口を押さえる。

ああ、こんな冗談まで言うんだ。

二人でパラソルの下、潮騒を聞きながら、砂浜でお昼寝。素敵すぎる。

あたしは、そのまま死んでもいいかも。

「あ、あたしも、ユウさんの水着姿見たいです。楽しみにしてますね！」

あたしのその言葉に、ユウさんは蒼白になった。
突然、立ち止まって手をバタバタ振り回す。

「ま、待って！やっぱり、海はまずい！プールもまずい！山にしよう！」

「ええっ！ど、どうしてですか？」

たった今浮かんだ、砂浜に二人で寝転ぶシーンがいきなり壊され、あたしは落胆を隠せず大きな声を出した。
ユウさんはガシッとあたしの両肩を掴み、顔を近づけて言った。

「僕にはね、人に見せられない傷痕が胸にあるんだ。だから、海パンになることはできないんだよ。」

「ええっ！何ですか、それ？」

胸に傷痕・・・？

大きな手術でもしたんだろうか・・・？
あたしは本気で心配になって青褪める。

「あたし、そんなの気にしません！まだ痛いんですか、それ？見せてください！」

「だ、だめだつて。あ、ちょっと美咲ちゃん、ここ歩道だつて！」

言われてハタと気付くと、あたしは彼の大きなＴシャツを掴んで捲り上げるところだった。

道行く人の群れがあたし達の周りを避けるように流れていく。

クスクス笑う声が聴こえた。

「ご、ごめんなさい！あたしつたら・・・！」

慌てて放した手で、あたしは顔を覆った。

恥ずかしくて、顔から火が出そう・・・。

あたしの肩に彼の手が触れた。

そして、その手はグッとあたしを彼の肩の下に引き寄せる。

あたしの耳元で彼の優しい声がした。

「美咲ちゃん、心配してくれてありがとう。」

もう、死んでもいい・・・！

あたしは彼の腕の下で既に瀕死の状態になっていた。

12話

その後、あたし達は映画館に入って、今話題になつてゐる映画を見た。地味な主人公が、ヘンなマスクをつけた途端、ハイな悪魔になつてやりたい放題するコメディ―だった。

暗い映画館の中で、隣にユウさんが座つて一緒に映画を見てる。それだけで、あたしは胸が一杯で映画の内容なんかよく覚えてなかつた。

彼は、面白いジョークが出ると声を上げて笑い、アクションシーンでは手に汗握つて、座席から体を乗り出した。分かりやすい程、感情豊かな人だ。

あたしは子供のような彼がますます好きになつてしまった。

どうしよう・・・。

あたし、ライブの時よりもっとユウさんのこと好きになつてゐる。あのクールなギタリストも、今、子供のように目を輝かせている彼もどっちも大好き！

このまま、ずっとこうしていたい・・・！

そう思つた時、あたしは自分でも驚愕の行動に出た。座席からそつと手を出した。

膝の上に置かれていたユウさんの手の甲にそつと自分の手を重ねる。恥ずかしくつて、あたしは真っ赤になつた顔を俯かせた。

これって、男の人が、もしくは痴漢がやることだわ……。お願い。

どうか、拒否しないで……。！

やがて、彼の反対側の手が、そつとあたしの手の甲を包んだ。少し湿っている大きな手だった。

暗闇の中の彼の横顔をあたしはそつと見つめる。

彼はあたしに優しく微笑んだ。

あたし達はそのままの姿勢で、固まっていた。

もちろん、映画の内容なんて、もうどうでも良くなっていた。

やがて、映画が終わって、エンディングが終わって、観客もバラバラと出口を目指して席を立ち始めた。

オレンジ色の照明がついた映画館の中で、あたし達だけがまだ座席に座ったまま手を握り合っていた。

静かなBGMが流れる中で、あたしはユウさんの手の温かさを感じていた。

言うなら、今しかない。

次回があるかどうかの保障もないのだから。

唐突に思い立ち、あたしは覚悟を決めた。

「……好きです！あたし、ユウさんのこと……。今日でもっと好きになっちゃいました。」

あたしは目をギュッと瞑って小さな声で言った。

ユウさんは硬直したまま、正面を見ている。

「僕のが好き？」

「・・・はい。好きです。」

それを聞いて、彼は髪を掻きながら、ちよつと困つた顔をした。

「美咲ちゃん、一つ質問していいかな？」

「は、はい。何ですか？」

急にくるつと首の向きを変え、あたしと向き合つと真剣な顔で言つた。

「同性愛つてどう思う？」

「・・・は？」

今、同性愛つて言つた？

一連の流れとかけ離れた質問が突然出て、あたしは拍子抜けた。

「あの、どう思つてどういうことですか？ユウさんが同性愛者つて意味ですか？」

「ち、違うよ。ただ、どう思つのか聞きたかつたんだ。例えば、美咲ちゃんは、友達の女の子を愛せる？」

「な、何言つてるんですか？」

あたしは質問の真意が掴めず、混乱し始めた。

あたしが、例えば、千春を愛せるかつてこと・・・？

それが、今あたしが告白した事と、何の関係があるの？

「深く考えないでよ。美咲ちゃんは女の子を愛せるかって質問なんだ。」

しどろもどろにユウさんは説明する。

でも、あたしにとっては深い意味のある質問だった。

あたしは、ユウさんの言わんとすることが分かったんだ。

「何なんですか・・・それ？あたし、真剣に告白してるのに・・・！」

座席を立て、あたしはカバンを掴んだ。

突然、立ち上がったあたしを見上げて、ユウさんは慌てる。

「お、落ち着いて、美咲ちゃん・・・。」

「もう、いいです！あたし、ユウさんが言いたい事、分かりました。へんな話して、話を逸らそうとするなんて、ずるいです。あたしが好きになったら困るってことですね。今日、あたしはすごく楽しかったけど、ユウさんはそうじゃなかったんですね・・・！！！」

溢れる涙を止める事はもうできなかった。

あたしは、慌てて掴まえようとする彼の手を振り切り、出口に向けて走り出した。

ロビーには次の上映を待つお客さんで賑わっていた。

あたしはハンカチで顔を抑えて、ノロノロとお手洗に向った。
この泣き顔で外に出るのは絶対嫌だった。

それに、女子トイレまでユウさんは追っかけて来れないだろう。

初めてのデート、あたし、死んでもいいくらい楽しかったのに。
初めての告白だったのに……。

真剣なあたしにあんな冗談言う必要がどこにあったんだろう。
断わる口実だったんだわ……。

人気のない女子トイレにあたしは入った。

ホテルみたいなタイル張りの綺麗なトイレだ。

手洗いの前にかかっている大きな鏡にあたしは自分の顔を近づける。
マスカラが取れて、酷い顔だ。

目の周りが真っ黒でパンダみたいになっている。

その顔が情けなくて、あたしはまた、目頭が熱くなった。

ハンカチでゴシゴシ擦っても、目の周りは黒く汚れていくばかりだった。

その時、鏡に人の姿が映った。

鼻をくっ付けんばかりに鏡に接近しているあたしを、その人は腕を組んで苦笑しながら見ていた。

あたしは、ギョっとして振り向く。

「ユウさん!？」

そこには、さっき振り切っておいてきた筈のユウさんが笑って立つ

て
い
た。

13話

そんな筈ない。

あたしの方が先に出たのに、どうしてここにいるの？
て、言うか、ここ女子トイレなんだけど？？

あまりの驚きに口をパクパクさせているあたしに、彼は近づいた。
さつきと同じ顔なのに、どことなく表情が違う。
ちよつと、ゾクつとするような迫力を感じた。

「ユ、ユウさん？どうして女子トイレにいるんですか？」

あたしは、取り合えず素朴な疑問を投げかける。

彼はあたしの質問には答えなかった。

答えの代わりに、いきなりあたしを抱きしめると、一番近くの個室
に引き込んだ。

二人で個室に入ると、ドアを閉め、素早く鍵をかける。

あたしは、何が何だか分からなくて、彼に抱きしめられたまま目
をパチパチさせていた。

「あ、あの？ユウさん・・・？どうした・・・！」

あたしの質問はそこで遮られた。

彼は狭い個室の壁にあたしを押し付けると、いきなり顔を近づけ、
唇を重ねた。

彼の右手があたしの首の後ろをしっかり支え、左手はあたしの顎を
支えて固定する。

自由を奪われたあたしは、ただ、彼のキスを受け止めた。

ギターの弦を押さえるせいだろうか。

左手の指先がザラつとした感触で、その指があたしの唇に触れた。

あたしの人生初めてのキスは、ただ、すごかった。

さっきまでのニコニコ笑っていたユウさんとは別人みたいだ。

あたしの唇を押し開き、彼の舌は強引にあたしの舌を絡める。

唇を征服し終わると、ユウさんはあたしを抱きしめ、首筋にキスを続ける。

時々、彼の歯が素肌に触れ、あたしは鳥肌が立った。

吸血鬼に血を吸われる少女になった気分。

体が痺れて動けない・・・。

それは強引で、甘くて、でも不思議と嫌じゃなかった。

やがて彼は体を離すと、あたしを真っ直ぐ見つめた。

真面目な顔だ。

切れ長の目がキリつとしている。

昨日のライブの時の真剣な瞳だった。

あたしが、大好きになったギタリストの鋭い視線だ。

彼はあたしの耳元に口をつけて、声にならない小さな声で囁いた。

「俺、あんたが好きだよ。」

それだけ言うと、彼はあたしを個室に残したまま、ドアを開けて外に出た。

トイレから走り去っていく足音が響く。

まだ、余韻に浸っているあたしは、呆然としたまま洋式トイレの蓋の上に座り込んだ。

何だったの、今の？

あたし、ユウさんにキスされちゃった・・・？

さっきまで彼の舌が這っていた首筋をあたしはそつと抑えた。

まだ、濡れた感覚が残っている。

ヨロヨロとあたしは個室から出た。

手洗いにはもう誰もいなかった。

ユウさん、どこに行っただろう？

どうして、一人で逃げちゃっただろう？

あたしはキヨロキヨロしながら、トイレの外に出た。

「美咲ちゃん！」

名前を呼ばれて顔を上げると、さっき一人でトイレから出て行ったユウさんが駆け寄ってくる。

息を切らしながら彼はあたしの肩を掴んだ。

「美咲ちゃん、ゴメン。僕、ヘンなこと言っちゃって・・・。そんなつもりじゃなかったんだ。」

「・・・ヘンなこと？そんなつもりじゃなかった・・・？」

あたしは愕然とした。

たった今、好きだって言ってくれたのはヘンなこと？

さっきのキスはこういうつもりだったの・・・？

あたし、からかわれたんだ。

咄嗟に思いついたのは、そのことだった。

「あ、あたし、初めてだったのに！」

急激に頭に血が昇ったあたしは、ユウさんのきれいな顔を平手で思い切り引つ叩いた。

思った以上の威力に、ユウさんは頬を押さえてよろめく。

「み、美咲ちゃん・・・？」

「もう、いいです！ユウさんの気持ちよく分かりました。あたしのこと、好みじゃなかったら、最初からそう言ってくれば良かったのに・・・ユウさんは、ふざけてあんなことできる人なんですか・・・？」

あたしは、頬を押さえたまま立ち尽くす彼を残して、映画館の廊下を出口に向かって走った。

14話

青ストライプのワンピースの後姿が遠ざかっていく……。

俺は、それを呆然と見つめる俺そっくりのケツに蹴りを入れた。
不意をつかれて、良は顔から廊下に倒れ込んだ。
受身を咄嗟に取った所はさすがに、柔道有段者だ。

「痛つてえ……うわっ!!!」

ケツを手で押さえて振り返った良は、俺の顔を見て今度は背中から
ひっくり返る。
器用なヤツだ。

「ゆ、優？お前いたのか？いつから???」

「うるせえ、いつからだっていいだろ。それより、何で泣いて帰っ
たんだ、あの子。」

「僕も分かんないんだ。僕が言った事が気に障ったみたいで……。

」

「……俺がしたこと気に障ったかな。」

「はあ？お前がしたことって何だよ？彼女に顔見せたのか？」

良は目を丸くして立ち上がった。

全く同じ服装で来た俺の前に、同じ背格好の良が向き合って立つと
鏡を見ているみたいで気持ちが悪い。

映画館を歩いていた客も、ぎょっとした顔で俺達を眺めていく。

俺は舌打ちして、良の腕を掴んだ。

「ここじゃ、ナンだからさ。場所変えようぜ。」

俺以上にシャイな良は、周りの目が気になりだして黙ってついてきた。

「さあ、言えよ。いつから付けてたんだよ？同じ格好で来たのはどういう意味だ？」

俺達は映画館に隣接する百貨店の中の喫茶店に入った。

コンタクトレンズを外して、いつもの瓶底メガネをかけると少しは別人に見えてきた。

「そんなに怒んなよ。気になってついてきただけじゃん。お前こそ、何で彼女泣かせたんだよ？」

俺も負けずに良の顔を睨み返す。

その言葉に良は少し怯んだ。

俺達が座った窓辺の席は窓から外が一望できて、なかなかいいロケーションだ。

その窓にゴツンと頭をもたれて、良は溜息をつく。

「映画が終わるまでイイ感じだったんだよな。終わったところでいきなり、好きだって言われたんだ。」

「何だと？」

俺は少し顔色を変えた。

身代わりの良と上手くいつてしまったら本末転倒じゃないか。
俺の動揺に気が付いた良は、慌てて両手をバタバタ振った。

「いや、だから、返事してないって。これじゃ、まずいと思って、
お前と付き合える子かどうか聞いてから返事しようと思って、先に
質問したんだ。」

「何を？」

「だ、だから、同性愛ってどう思ってた。女の子好きかって・・・」

俺は立ち上がって被っていたキャップを掴むと、このボンクラの頭
を思いっきり引つ叩いた。

「でめえ、バツカじゃねえのか？　どういう流れでそのネタが突然出
て来るんだよ？　不自然だろ！」

「お、落ちつけたら・・・。確かに僕はバカだったよ。でも、そ
れを打診するのが今日の目的だろ？」

「空気読めよ。せつかく告白したのに返事がソレじゃ、バカにして
んのかって思うだろ。」

俺の言葉に良はハッとして口を押さえる。

「そ、そうか・・・！　確かにそうだね。彼女、それで怒っちゃった
んだ。」

この天然ボケが・・・。
でも、仕方ない。

こいつは女の子とデートなんてしたことなかったんだから。

俺は頭にキャップを被せて、溜息をつきながら座り込んだ。

人選がまずかった。

女心を読むには、良は経験値が低すぎる。

「そうは言うけどさ、僕はお前の為に良かれと思って先に聞いておこうと思ったんだ。お前こそ彼女と接触したのか？いつからつけて来たんだよ。」

負けずに良も反撃に出てきた。

痛いところを突かれた俺は、少し齒切れ悪く小さな声でブツブツ答える。

「・・・最初っからだよ。お前らがマクドでヨタ話してる時はパーティーシヨンの裏のテーブルにいたし、映画館の中は最後列にいた。」
今度は良が血相変えて立ち上がる。

「じゃあ、ずっと見てたのか？もしかして話も？」

「・・・断片的には。ああ、ギターのセッションはやってもいいよ。でも、海は勘弁・・・。」

途端、今度は俺の頭に良のキャップが叩きつけられる。

興奮で真っ赤になって肩で息をしながら、良が怒鳴った。

「お、お前、悪趣味にも程があるぞ！恥ずかしいじゃんか！」

「何で？イイ感じだったじゃん？お前だってまんざらでもなかったクセに。」

「そういう問題じゃないだろ！人権侵害だ！僕だって初めてのデートで必死でやってたのに・・・。」

途中、涙声になって良は椅子に座り込んだ。

その時、俺達が注文した緑色のクリームソーダをウェイトレスのお姉さんが持ってきた。

そっくりな俺達の顔を見比べて、面白そうに微笑みながらクリームソーダをテーブルに並べて、お姉さんは去っていった。

「・・・そんなに怒るなよ、良。頑張ってくれた事には感謝してるから。」

さすがに少し申し訳なくなつて俺は一応そう言ってみる。

良はキャップを握り締めて、顔を抑えた。

「・・・でも、結果的に大失敗だよ。怒らせて帰しちゃったんだから。彼女に悪い事したかな・・・。」

「お前だけのせいじゃないよ。俺もまずいことしたし・・・。」

その言葉に良はハッとして起き上がった。

「そつだよ、お前いつ、彼女に会ったんだ？僕のふりして顔見せたのか？」

僕のフリはないだろ。

お前が俺のフリしてるくせに。

俺は渋々、告白した。

「・・・女子トイレに泣きながら駆け込んできたから、映画見て泣いちゃったんだと思つて・・・。」

個室に引き摺り込んで、キスした。」

「な、何だつてえ！??」

良は顔面蒼白で立ち上がった。

15話

「ありえない！そんなことしたら怒るに決まってるだろ！初対面の女の子だぞ！」

「怒らないよ。だってお前のこと好きだって言っただろ？好きな男にキスされたら、どんな女だって喜ぶさ。お前がなかなか手を出しそうもないから、手伝ってやろうと思ったんだ。」

「余計なお世話だ！てか、何だよ、その男尊女卑思考は！全ての女がお前みたいなアバズレだと思っなよ！」

「何だと、このやろう！」

俺も思わず立ち上がって、良の胸倉を掴んだ。

今回は良も負けていない。

掴んだ俺の胸倉を掴み返す。

クリームソーダの載ったテーブルを挟んでそっくりさんが二人で掴み合っているのはさすがに人目を引いた。

さっきのお姉さんが、様子を伺って厨房からチラチラ見ている。

俺は舌打ちして、良を離れた。

「止めとこう。今更、僕らが争う意味がないよ。結局、嫌われちゃったんだから。」

「・・・そうだな。」

低い声で言っただ良の言葉に俺も同意した。

百貨店を出ると、外はもう薄暗くなっていた。

湿気の高い空気で空は澱んでいたが、一番星が見える。

俺達はお互い無口で、家路に向う市バスに乗った。

二人掛けのシートに並んで座ると、乗車してくる客が必ず振り返って苦笑する。

双子がそんなに珍しいか。

かと言って、どうする事もできないので俺はキャップを目深に被って寝たフリをした。

「・・・せめて謝りたいね。連絡先、聞いておけば良かった。」
隣で良の声がした。

窓に頭をくつつけて外を眺めている。

「・・・遅せえよ。向こうがまた電話してくるの待つしかない。」

冴えない二人だった。

神様がバチを与えたに違いない。

でも、一番傷ついてるのは彼女だろうな。

俺はキスした時の彼女の唇の柔らかさを思い出していた。

震えてたけど、懸命に応えようとしていた。

悪いことした。

でも、どうせ結果は同じだっただろう。

俺が女だって言った時点で、結局は終わるんだから。

早いか、遅いかの違いだ。

俺は自嘲してまた目を瞑った。

その夜、俺はまた良を求めた。

いつもの熱さと虚しさが俺を襲ってきたからだ。

俺達は、二部屋のアパートで二つベッドを別々の部屋に置いて生活していた。

一応、性別の違う俺達を考慮した親がやってくれたことだったけど、

俺は自分のベッドで寝たことはほとんどなかった。

「・・・良。起きてる？」

寝ている良に一応、声かけてみる。

その声で、良は薄目を開けた。

返事を待たずに、俺は良のベッドに潜り込む。

薄い布団の中の良の体は、少し汗ばんで湿っていた。

眠っていたせいで、体温が上がっている。

良のシャツの下に手を這わせて、俺は良の胸に顔をくっつける。

心臓の音が、俺の焦燥感を少し和らげてくれた。

俺の頭を良の腕が抱きしめた。

「・・・また、体が熱いの？」

半分、寝ぼけたような良の声がした。

「・・・うん。」

今日はテンションが上がらなかった。

いつもの体の熱さに加えて、ものすごい脱力感と絶望。

この先、俺を愛してくれる人には巡り会えないんじゃないかってい

う不安と焦燥感。

常に俺を支配している様々な負の感情が一気に押し寄せてきて、俺は押し潰されそうになる。

俺は体を起こして、良に口付けた。

良は黙ってそれを受け止めてくれる。

こいつは自分から絶対、アクションを起こさない。

俺がされるのが嫌いなものを知ってるからだ。

散々酷い目に逢わせてきたのに、俺が求める度、凝りもせず己を提供してくれる。

「・・・どうしたの、優？元氣ないね。」

良がキスの合間に問いかけた。

悔しいけど、見抜かれてる。

コイツには弱みを見せたくないのに。

俺は自嘲的に笑った。

「・・・ないよ。いつもみたいなのが希望なら悪いけど。」

そういった俺の言葉に良は笑う。

「アレは僕の希望じゃないよ。今日はどうしたいの？」

「分かんない。誰かにしがみ付きたい。」

俺は良の首に腕を回して抱きついた。

その俺の背中を良の両腕が抱きしめる。

適度な拘束感が俺を安堵させる。

良は時々、俺の考えてる事が聞こえてるんじゃないかと思うくらい、俺の希望を忠実に実行する。

生まれる前からの付き合いだからなのか、元から姉さん女房的な世話焼きの性格故か。

良がいないと俺は壊れてしまう、と思う。

でも、こいつが俺が望む相手ではないことも確かだった。
残念だけど。

「良。俺、病気じゃないって言ったけど、やっぱり病気かも。」

「・・・何の？」

「セックス依存症。お前の体がないとダメ。」

俺の返事に良は苦笑する。

「何だよ、それ？」

「お前がいないと俺、ヘンになりそうだ。この先、誰にも愛して貰えなくて、一人で生きてくのかって思ったら怖くて・・・。」

俺の背中に回した良の両腕に力が入る。

俺を安心させるように、良の優しい声がした。

「依存しろよ。僕で良かったら。」

本当は自覚している。

強がってても、俺はいつも寂しくて怯えている。

俺を愛してくれる人なんかいる筈ないって、もうずっと前から分かってるんだ。

俺はその苛立ちを良にしかぶつけることが出来なideいた。

16話

良にキスを続けながら、俺は今日の女の子のことを考えていた。

あの時。

最後列で二人を観察しながら、俺は映画が終わる少し前に席を立った。

トイレで用を済ませ、手を洗っていると、さっきまで良と肩を並べて映画を見ていた彼女が泣きながら飛び込んできた。

俺は咄嗟に個室に隠れた。

彼女はヒックヒックとしゃくり上げながら、化粧が溶けて真っ黒になった目を必死でハンカチで拭いていた。

拭けば拭くほど、目の周りが黒く汚れていく。

俺は可笑しくて苦笑した。

近くで見ると本当にかわいらしかった。

ブリブリの乙女ワンピースがこんなに似合う子は見たことがない。

白い肌が泣き濡れてピンク色に染まっている。

鏡越しに、彼女と目が合った。

びっくりして振り返ったあの顔。

その後は、もう衝動に駆られるまま、俺は動いてしまった。

あの子とは、どの道、縁がなかったんだろう。

自分が欲しいものを手に入れるのが、どれほど困難なのかを、俺はもうずっと前から知っている。

俺は黙ってされるがままになってくれている片割れを見た。
良は優しい。

でも、こいつの顔を見ていると、往々にして俺は凶暴な欲望に駆られる。

良が苦しがつて喘ぐ姿は、すなわち俺だ。

俺は女っぽいその表情を見ると、ヘンな気になる。

俺が苦しめて抹殺したいのは、自分自身なのかもしれない。

いつの間にか着ていたシャツは消え去り、汗ばむ体を俺達はお互いすり合わせていた。

「ねえ、優。もし、あの子が、お前が女でもいいって言ったら付き合うつもりだった？」

暗闇の中で良の声がした。

良の首筋を噛みながら、俺は笑った。

「・・・言う訳ねえよ。最初っから分かった。そんなヤツ滅多にいないんだから。今日は女がないお前にいい思いさせてやろうと思ったただだよ。」

俺の言葉に良は無言で、ただ、俺の髪をなでた。
負け惜しみだつて完全にバレてる。

「お前はとうすんだよ？もし、俺に彼女ができたなら。妬けるか？」
「・・・妬けるよ。その子を殺してやりたい。」

冗談で言ったその質問の返事が、直球で返って来て、俺はビビった。
いつもヘニヤっとしている良が、こんな過激な発言をするのは珍し

い。

「何だよ。ヘンな事言っなよ。」

「お前は男でも女でもないんだろ？僕がお前を好きじゃ悪いか？」

「・・・お前、おかしいよ。男とか女とかの前に俺達、双子だろ？」

「だったら、何で兄とこういう事するんだよ？お前こそ、おかしいよ。」

俺達は笑ってまたキスを繰り返した。

どっちも病んでるのは、間違いない。

生まれる前から一緒だったこの片割れが不可欠なことは、お互いに自覚していた。

どんな昨日の後にも、必ず朝は来る。

初夏というより、真夏の朝日が顔に当てって、俺は目を覚ました。

横に寝ていた筈の良はもういない。

気がつくと、ドリップしたコーヒーの香りが狭い部屋に充満している。

「優、今日、月曜日だよ。一講目ある？」

良が台所から顔を出した。

いつものダサイポロシャツに瓶底メガネ。

かっこいいつもりなのか、シャツはジーンズの中に入れてベルトをしている。

大学で俺達が双子なのを知ってるヤツは実はあまりいない。

学部が違つと、会うこともないし、そもそも俺はあまり大学に行っ

てない。

留年しない程度には出席しているが、必要最低限だ。だから、俺が女だって知ってるヤツも殆んどいない。

「・・・ある。今日は出席取られるヤツだから、行く。」

俺は素っ裸のまま、良の脇を通り過ぎてユニットバスに向った。

大きめTシャツとカーゴパンツに着替えて、俺はいつもの椅子に座った。

いつも大きめの服を着ているのには理由がある。体の線を見せたくないからだ。

幸い、俺は女にしては大柄で、胸もお尻もペタンコのまま大きくなつた。

でも、かと言って本物の男に比べたら、あちこち細くてピッタリした服装をしていたら、バレてしまう。

大学であまり喋らないのも、そのためだ。

喋っても元から低い声だからバレることはそうなかったけど、俺は自分の声が嫌いだった。

よく似てると言われるのが、宮崎アニメに出てくる少年ヒーロー声。中途半端な中性的な声は、俺自身を象徴しているかのようにだった。

自分の中の女性の部分を完全否定するつもりはない。

どんなに足掻いても俺は女だし、それについてジタバタ抵抗するほど子供でもない。

見かけはこんなでも毎月生理は来るし、こんなにナヨな良にも力ではもう敵わないことも知っている。

でも、自然体でいると、普通に男っぽくなってしまいうし、好きになるのもいつも女の子だった。

ただ、それだけだ。
俺は精神病でもないし、意地を張って男になろうとしているつもりもなかった。

良の入れたコーヒーに口をつける。

良は俺のためにベーコンエッグを作って、トーストと一緒にテーブルに並べた。

かいがいしく給仕をする良を俺は眺めながら思った。

こいつこそ、本当は女に生まれたかったに違いない。
口には出さないけど。

後片付けするから先に行つて、と言う良をアパートに残して、俺は自転車で大学に向った。

日差しはかなり強くなってきている。
今日も暑くなりそうだ。

一講目の授業が始めるまで、まだ30分ほど時間があつた。
することもないので、俺は軽音部のクラブハウスに向った。
大学の校舎から少し離れた場所にコンクリートの二階建ての建物がある。

クラブ活動やってる奴らの着替えスペースになっていた。

俺の所属する軽音部は、登録している人間はそれこそ100人くらいはいるんだけど、ここに集まることは1年に1回くらいだ。もっぱら、楽器や機材置き場として利用することが多い。

ここで知り合った仲間と各自バンドを組んで、個人的に活動するのが殆んどなので、ここに集まる必要はないのだ。

俺は誰もいない軽音部のクラブハウスのドアを開けた。

熱気と埃が溜まった部屋の窓を開け放つ。

誰もいないクラブハウスは、夏休みに一人でできてしまった教室みたいな静けさだ。

誰かが置いたままにしているアコースティックギターを見つけて、

俺は椅子に座って構えた。

抱えたアコギの上に肘を乗せて頬杖をついて、昨日の出来事を思い出してみる。

抱きしめた女の子の柔らかい感触、シャボンの香り、小さな甘い声。何となく、メロディーが浮かんだ。

俺をいつも呼んでくれる先日の夜店バンドは、3回生の茶髪のギターボーカル圭介さんが作詞作曲したオリジナルが多かった。

ディープパープルやエアロスミスを敬愛している彼の曲は、少し昔のハードロックっぽくて、俺は嫌いではなかった。

でも、本当に俺が好きなのはアコギやピアノのイントロで始まるような、ベタベタラブバラードだった。

そう、2、3年前くらいに流行った「You're the Only」みたいな。

あの歌手はそれ以来、一向に見ることはなかったけど、最初にアレを聞いた時は俺は不覚にも涙が出た。

圭介さんは男性ギタリストらしく、早弾きに命を懸けている。
でも俺はギターテクより、心にグツとくるラブバラードを切々と弾くのが好きだった。
きつと音楽の感性は女なんだろう。

コードを適当に押さえて、俺はメロディーを口ずさんだ。
・・・そういえば、あの子、ピアノと一緒にセッションしたいって
言ってたっけ。

俺の曲のイントロ、弾いてくれたかな？
昨日、上手くやってればの話だけど。
今となつては後の祭りだ。

その時、部室のドアが突然、勢いよく開いた。
バン！という大きな音に俺はビビって、慌てて口を押さえる。
ヤベ。

声、聞かれたかな・・・？

そう思つて、ドアを見て俺は固まった。
そこには、さっきまで考えていた、昨日の女の子が立っていた。

17話

「ユウさん・・・やっぱり、ユウさんだった。」

俺は口を押さえたまま、呆然と彼女を見た。

開け放した窓から吹き込む風に長い髪を絡ませ、彼女はそこに立っていた。

膝丈くらいのフワンとした花柄のスカートにレースの胸元の白い上着。

清楚過ぎて、怖いくらいだ。

彼女はスカートを揺らしながら、ゆっくり俺の方に歩いてくる。

俺はビビッてアコギを抱きしめて硬直していた。

な、何でここにいてるって分かったんだろう。

てか、何で来たんだ？

まさか昨日の逆襲？

俺の前まで来ると、彼女は優しく微笑んだ。

長い睫毛に縁取られた大きな黒い瞳がキラキラしている。

昨日、俺がキスしたピンク色のポテッとした唇は今日も健在だ。

そのかわいさに、俺は呆然としてしまう。

何で、こんなかわいい子と俺が同じ女なんだろう。

神様の悪戯なら、もう反則だ。

彼女は今だ硬直している俺に話しかけた。

高い、かわいい声はカナリアみたいだ。

「さっき、校門の前で夜店バンドでボーカルやってた茶髪の人に会

って、ユウさんが軽音部だって教えてもらってたんです。暇な時はよくここにいて。そしたら、ギターの音が聞こえて……。あたし、合唱部だから、実は隣の部室に時々来るんですよ。今まで逢ったことなかったですよ。」

・・・合唱部？

俺がここでギター弾く度、やかましい！って怒鳴り込んでくるあの煩い女どものクラブか？

何か言おうにも、今喋れば昨日の良の声と全然違うのがバレてしまう。

俺は黙って首だけ縦にコクコク振った。

「昨日は、引つ叩いちゃってごめんなさい。しかも、突然帰っちゃって……。あたし、断わられちゃったのが悲しくって。でも、ありがとうございます。楽しかったです。彼女じゃなくても、これからもお友達になってくれませんか？」

恥ずかしそうに彼女は言った。

昨日のあの後、この態度。

なんて人間できた女の子なんだ。

でも、俺達は断わった訳じゃない。

ややこしいことしたのは申し訳なかったけど、全ては誤解の連鎖だ。俺はカバンから筆記用具を引っ張り出して、メモ帳に殴り書きした。

・断わってない！へんなこととしてゴメン！もう一回付き合ってください！

彼女は殴り書きを見て、はっと口元を押さえた。
そして、俺をまた見つめる。

「・・・どうして紙に書くんですか？」

素朴な疑問だ。

俺はお約束の答えをまた書いた。

- 風邪ひいて声がでません 今日はいしゃべれませんか

それを見て、彼女は心配そうに眉を寄せた。

「大丈夫ですか？もしかして、昨日のせいで？」

くっそお、面倒くせえ！

俺はまた紙に書き殴る。

- 大丈夫です、それより、海いこう。来週日曜日の朝9時に昨日の
マクドナルド前、水着と弁当持参で集合、OK？

彼女の顔がぱつと明るくなった。

花が開花したような笑みが浮かぶ。

「嬉しい・・・！あたし、てっきりユウさんに断わられて、遊ばれ
たんだって思っちゃって・・・。OKです！来週、楽しみにしてま
すね。」

彼女はアコギにしがみ付いている俺の手を取った。

その柔らかい感触に俺は赤面してしまう。

動揺した俺の手からノートがポトッと床に落ちた。

「左の指先、荒れてますね。ギター頑張ってるんだ・・・。今度、
ピアノとセッションして下さいね。」

俺は動揺しながら、コクコクとバカみたいに首を振った。

その時、再びボタン！とドアが開く音がした。

「おい！ユウ、いるかあ？さつき、かわいい女の子がさあ、お前
のこと・・・！」

デカイ声で笑いながら入ってきたのは、茶髪のボーカル、圭介さん
だった。

手を握りあつて見つめ合つてゐる俺達を見て、圭介さんは口を押さえ
て硬直する。

「あ・・・ごめん！お邪魔しました！」

そう言つて慌ててドアを閉めようとする。

可哀相な彼女は湯でダコのように真っ赤になって、俺の手を放すと
ドアに向つてダッシュした。

そのままの勢いで、圭介さんをドーンと突き飛ばすと、部屋を飛び
出していった。

まだ、アコギを抱きしめて固まっている俺を見て、圭介さんは遠慮
なくアハハ・・・と笑い出した。

「ごめん、ごめん！邪魔して悪かったよ、色男！」

全然、悪いと思つてない・・・。

俺は恨めしそうに彼の顔を睨んだ。

でも、まあ、いいや。

次のアポは取れた。

後は、また良に行かせてご機嫌取らせればいい。

俺はまだ彼女の手の感触が残る手を握りしめた。

18話

「で、何でまた僕が行くんだよ。」

夜、アパートに戻ってから俺はキッチンにいた良に今日の出来事を話した。

再び身代わりをお願いすると、良は完全にうんざりした顔で溜息をついた。

そう言うと思った。

俺は気にしないで話を続ける。

「いいじゃん。今度こそ彼女を喜ばせてあげたいんだ。俺はもう余計なことしないからさ。頼むよ、あと一回だけ。」

俺はスリスリ手を合わせて良を上目使いで見つめる。

反則技、女の武器だ。

この作戦にこいつが弱いのは昔からよく知っている。

良はキッチンのテーブルに頬杖ついて、缶ビールを揺らしていた。

グイッと一口いった後、俺をビン底メガネの奥の赤い目で睨む。

ちよつと酔ってるみたいだ。

こいつが悪酔いするのは珍しい。

「・・・お前、結局、何がしたいんだよ？」

「何って？」

「僕がお前の代わりに行く事に何の意味がある？あの子と付き合いたいのは僕じゃない、お前だ。」

あの子が好きなのもギタリストのお前だろ？どうして、話をややこしくしたがる？」

「それは、前に言っただろ。俺は・・・女だって分かってから逃げられるのが怖い・・・。」

言ってから、自己嫌悪になる。

良を身代わりにする事で俺は執行猶予を伸ばしてるんだ。

まだ、希望を持っていたいから。

そんなことは自覚している。

ただ、夢を見ていたいんだ。

良があの子と仲良く歩いている姿に、俺は自分を重ねていた。

「僕はそれが意味がないって言ってるんだ。お前が女なのはごまかしようのない事実だ。それを隠したまま付き合える筈ないだろ？」

いつになく厳しい良の言葉は、俺の胸に刺さった。

「何だよ・・・行きたくないってこと？嫌ならいいよ。」

「じゃあ、どうするんだよ？お前が海水パンツで行くのか？それとも断わる？」

理屈っぽく絡んでくる良に俺はム力つき始めた。

ナンなんだよ、今日は。

いつものナヨっちい良じゃないみたいだ。

ビールが悪影響を与えてるのかもしれない。

「あー！もう、ウザってえな！いいよ、もう！お前には頼まない！」
俺は面倒臭くなって良に向って怒鳴った。

良は俺を赤い目で凝視して、少し笑みを見せた。
なんか嫌な笑い方だ。

よく俺がやる悪い力才。

完全に酔ってやがる。

「優、賭けしようよ。僕の言う条件を飲んでくれたら、僕は身代わりになる。」

不敵な笑みを浮かべて良は言った。

「・・・何だよ？一応、聞いてやる。」

「僕が思うのは、彼女だって僕のことが見抜けないようじゃ、お前が好きだって言う資格ないだろ？本当にお前のことが好きなら、別人だって気が付かなくちゃ。」

「・・・だから、何だよ？」

良は立ち上がって、ベッドに腰掛けていた俺の横にやってきた。体が触れ合うくらいに近い距離に腰掛ける。

アルコールで体温が上がっている良の熱い腕が俺の腕に触れた。

「彼女を海に連れて行くよ。そこで一緒にいる間に、彼女が別人だって見抜くことができれば、お前は彼女にカミングアウトしてから告白しろ。ちゃんと姿を見せてだ。」

「・・・できなかったら？」

良は俺を真っ直ぐに見つめて、はっきり言った。

「彼女のことは忘れて、僕と一緒にいて欲しい。お前流に言ったら、僕にもやらせろよ。」

「おい・・・何、冗談言って・・・。」

言いかけた所で、良のキスが俺の口を塞いだ。

ほら見る。

病んできると言っても、俺はまだ普通だ。

一番、病んでる・・・いや、もはや狂ってるのは、この双子の兄貴の方だった。

19話

良は無意識に逃げようとする俺の頭を抱き寄せ、強引にキスを続ける。

その圧倒的な腕力に、俺は少し怖くなって良の熱い体を押し返そうとした。

だけど、それが全く無駄な抵抗だと分かるまで、時間はかからなかった。

「・・・お前、何言ってるんだよ？酔ってるのか？俺は一応、お前の妹だって。付き合うとか、無理だから。それに俺が好きなのは女の子なんだ。お前じゃない・・・。」

これはジョークだろ？

引きつった笑いを浮かべて、俺は言おうとしたけど、良のキスがまた俺の言葉を遮る。

ダメだ。

完全にイカれてる。

「・・・知ってるよ。僕は、お前が男でも、女でも、妹でも、何でもいいんだ。残念だけど、女のお前と付き合う女の子なんて滅多にいないよ。自分が一番分かってるだろう？いなかったら、どうする？一人で生きていくのか？」

畳み掛けるように吐き出される良の言葉は、弱っている俺の胸にズキズキ突き刺さる。

一番、俺が恐れている言葉だった。

それを、一番言われたくない相手に言われた俺は、良を突き飛ばし思わず立ち上がった。

「うるせえ！てめえに言われる筋合いはねえよ！人の気も知らないで勝手な事言うな！」

普通なら、ここで良が黙り込んでケンカは終了するのだが、今日は良も黙ってなかった。

俺と同じように立ち上がって、真正面から俺を見つめる。

「優は覚悟が足りないよ。お前は男でも女でもないんだろう？マイノリティとして生きていくなら、孤独は付きまとうさ。一人で生きていくのが怖いなら、女の子に戻ればいい。」

冷静に正論を語る良に、俺は完全にキレた。
胸倉を掴んでグイッと顔を近づける。

こいつに俺の気持ちがかかってたまるか・・・！
好きでこんな風に生まれた訳じゃない。

自分でもコントロールできないんだ。

女の子になれって言われてなれるもんじゃないんだって・・・。

気が付いたら、俺の両目から涙が溢れていた。

悔しい・・・悔しい・・・！

良なんか、俺が欲しかった体も持ってて、俺より力もあるじゃないか・・・。

俺の気持ちなんて分かりっこない。

俺の涙に怯むことなく、良は胸倉を掴まれたまま、俺を抱きしめる。
振り払おうと抵抗したけど、もう良の力には敵わなかった。

中学生までは、まだケンカで負けたことなかったのに・・・。
いつの間にこんなに強くなってたんだろう。

抱き締められた俺の耳元で、良の熱い息がかかる。
アルコールの匂いと、熱い息遣いとともに、良の低い声がした。

「優、僕はお前が好きなんだ。だから、僕は覚悟してる。お前が一人で生きてくのが怖いなら、僕を道連れにすればいい。お前が一人にならないように、どこまでも付き合うから。」

キザな台詞に俺は泣きながら、鼻で笑った。

「嘘言っな！お前だって女ができれば、俺のことなんてどうでも良くなるさ。その後、俺はどうしたらいい？」

俺はな、今まで何度も女に逃げられてんだ。多分、この先もな。一人にされた時の辛さがお前に分かるか！」

なんか、俺、みつともないこと怒鳴ってるな・・・。
ただのモテない男みたいだ。

でも、もう暴走した感情をコントロールすることはできなかった。
ヒステリーを起こして腕の中でもがく俺を、良は抱きしめたままベツドに押し倒した。

俺がいつもするみたいに、Ｔシャツの中に手を入れると俺の体の線をなぞるように滑らせる。

体温が上がった熱い良の掌が素肌に触れると、ヒートアップしていた俺の感情が不思議なほど静まっていった。

「だから僕を連れて行け。お前を一人にしないから。ずっと、お前と一緒に生きてやるよ。」

銀縁メガネの奥の俺と同じ瞳は、全くブレることなく俺を見つめていた。

その言葉に、俺の体の方が先に反応する。

認めたくない。

でも、俺の中の女性の部分、一番弱い部分にその言葉は突き刺さった。

平たく言えば、嬉しかったんだ。

俺の中の弱い女の部分が、男の良にすがろうとしている。

でも、待てよ。

俺が好きなのはコイツじゃないだろ？

俺の冷静な部分がそう問いかける。

俺はどっちが自分なのか、分からない。

往々にして起るこの現象に、俺はいつも振り回される。

俺の体にぴったり当てられた良の掌は、体中をなぞった後、僅かな胸の突起に触れた。

意思とは無関係に反応してくる体に、俺は動揺する。

ある事実には俺は気が付いた。

それは今まで、女の子としてサレたことが無いって事。

このまま続いたらどうなっちゃうのか、自分でも分からない。

俺は、覆いかぶさっている良の腹の下に両腕を差込み、渾身の力で押し返した。

「ま、待て・・・！お前の言うことは分かった。その賭け、乗るよ。彼女が気付いてくれたら、俺は彼女の前に現われる。気付いてもらえなかったら、お前が俺を好きにすればいい。今までのお返しだ、ヤラれてやる。」

だから、今は勘弁してくれ・・・！」

最後は助けを求める悪者みたいな涙声で懇願する俺を、良は笑って見下ろした。

そして、ホールドアップされたみたいに両腕を上げてゆっくりベツドから離れる。

俺はやっと自由を取り戻し、ガバっと起き上がった。体中に鳥肌が立っている。

今のが、悪寒だったのか快感だったのかは分からなかったけど。

「了解。約束だよ。言っとくけど、僕も本気モードで行くからね。」

憑き物が取れたような、いつもの邪気の無い顔で良は笑った。

19話（後書き）

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございます。
ここで、第3章終了です。
次の展開にご期待ください。

20話

決戦の日曜日が来た。

優とは今週中、全く口をきかなかった。

あの夜から、優は今まで使った事のなかった自分の部屋のベッドで寝るようになり、食事の時もテーブルに向い合う僕には目を合わせないようにしていた。

それがあまりに露骨なので僕も気まずかったんだけど、今回は僕から折れるつもりはなかった。

僕は優が好きだった。

それも女の子として。

いつも言ってるのに、あいつが今まで受け止めなかったただけだ。

たまたま、きっかけがあの子の出現になっただけで、いつかは僕が切り出していたことだった。

優に彼女ができたら殺してやりたいっていうのも、本気だった。

病んでるというより、もう狂ってるのかもしれない。

そう思われても全然構わなかった。

16才の時、初めて優と一つになってから、僕は失われた自分の半ピースを取り戻そうとしていた。

シャワーを浴びてから、コンタクトレンズを装着し、優のいつもの服を着る。

長めの前髪をかきあげ、悪そうな顔をしてみると、我ながらウリ二つだ。

考えたら、優が彼女と顔を合わせたのはライブの時とトイレの個室、

そして軽音部の部室だけだ。

その間、一言も言葉を発してないんだから、本人が別人かなんて分かる訳ない。

この賭けはデキレースだ。

僕は、完全に優に分の悪い勝負をしてでも、彼女を諦めさせたかった。

僕が嫉妬に狂いそうなのも一理あるけど、それ以上に優に悲しい思いをさせたくなかったからだ。

一応、ノーマルな僕から言えば、優と一生添い遂げる女の子はこの世にはいないと思われた。

優には辛い事実だと思うけど、それが現実だ。

だから、僕が優と一緒に生きていく。

16歳のあの日から覚悟はできていた。

隣の部屋から、アコースティックギターの音が聞こえてくる。
優はもう起きてるらしいが、部屋から出て来ない。

僕は、二人の部屋を遮る襖をノックしてから、そっと開く。

「優、僕、そろそろ行くよ。」

ベッドに座ってギターを弾いていた優が、僕の声に顔を上げる。
何か言いたげな顔で口を開いたが、すぐに俯いてしまった。

「彼女に何か、伝えたい事ある？」

僕の問いかけに、優は再び顔を上げた。

「・・・俺、曲作ったんだ。もし、今日、彼女が気が付いてくれたら・・・イントロのピアノ伴奏をお願いしたいって・・・言ってくれる?」

「一応、聞くけど、どんな曲?」

僕の質問に優は少し笑って、髪をかきあげた。

「ベタなラブソングだよ。付き合うことになった暁には、俺があの子に歌ってやる。」

「その凛々しいヒーロー声で?」

「ああ、もう隠さないよ。」

思いがけず勝気な表情で、優は僕を睨んだ。

まだ、全然諦めてないんだな。

僕も不敵な笑みで、それに応える。

「伝言は伝えるよ。彼女が気付いた時にね。」

「良、公平にジャッジしろよ。」

「分かってる。でも、お前が負けても文句なしだ。その時は覚悟しとけよ。」

「・・・何のだよ?」

優は、僕の真面目な返事に苦笑した。

僕も思わず顔が緩む。

ダメだ。

私情は禁物だ。

緩んだ顔を引き締めて僕は言った。

「待つてろよ、お前にスカート履かせてやる!」

そう言い捨てて、僕は物が飛んでくる前に襖をピシャッと閉めた。

アパートの駐車場に僕は向った。

昨日から借りているレンタカーがそこに置いてあるからだ。

こんな僕だけど、意外にも車好きだ。

高校3年生の時、18歳になるのを待って、僕はすぐ教習所に行った。

もちろん、学校には内緒でだ。

下宿を始めてからは車に乗る機会は、実家に帰った時だけになってしまったけど、それでも時間があれば、一人でドライブしていた。優にはそういう興味がないらしい。

その点はやはり女の子なんだろうか。

優の変化するキャラが、僕には今だによく把握できなかった。

優自身も、分からないんだろう。

どうせなら大好きなスポーツカーにしようと思って、借りたのがこの白いスカイライン。

GTRではなかったけど、形だけは僕の好きなものだった。

女の子だってかっこいい車に乗りたいに違いない。

僕はエンジンをかけてクラッチを踏み込む。

待ち合わせの駅前のマクドナルドに向って、スカイラインは爆音を上げて走り出した。

駅前は人でごった返していた。

交通量も増えて、マクドナルドの看板は見えてるのに、なかなか前に進まない。

窓を開けてぼんやり前方を眺めていると、歩道をこっちに向って駆けてくる女の子が見えた。

長い髪をポニーテールにして、白いワンピースと麦藁帽子。サンダルを履いた真つ白な素足が眩しい。

間違いなく、美咲ちゃんだった。

大きな手提げカバンを重そうに、肩に掛けている。

あれは、ぼくが頼んだ弁当だと直感した。

彼女は渋滞で止まっている車の助手席に素早く乗り込んだ。

ドアを閉めた途端、シャボンの香りが車の中に漂う。

不覚にも、僕の鼓動が速くなった。

「ユウさん、ありがとうございます。本当に海に行けるなんて思ってたなかった。嬉しいですよ！」

無邪気な顔で美咲ちゃんは笑う。

まさか自分が別人とデートしてて、それが賭けのネタにされてるなんて、夢にも思っていないだろう。

「僕も嬉しいよ。じゃあ、海に行きますか。」

精一杯の笑顔を作って、僕はギアを握り締めた。

21話

海開きしたばかりの海水浴場はカップルや家族連れで結構込み合っていた。

僕は浜に近い草むらの臨時駐車場に車を止めて、人でごった返す海岸へ向った。

ビーチサンダルに熱い砂が歩く度にかかって、気持ちがいい。海なんて何年ぶりだろう。

今日の目的も忘れかけて、僕のテンションは上がってきた。

僕は、横を歩いている麦藁帽子の小さな女の子をチラリと見た。白い顔がピンク色に染まって、鼻の頭に汗をかいている。

横顔を見ると、長い睫毛が良く目立つ。

文句なしにかわいい女の子だ。

優がいなければ、僕がお付き合いしたいくらいだった。

考えたらそういう選択肢もあるだろう。

僕がこの子と付き合うことになるって危惧は、優は持たなかったのだろうか。

「ね、ユウさん。今日は泳げるんですか？」

僕が黙っていたら、彼女が突然、話しかけてきた。

気を遣ってくれているに違いない。

僕は、慌てて笑顔を作る。

「泳げるよ。どうして？」

「この前、胸に傷痕があるから、海パンになることはできないって言いませんでした？」

彼女は心配そうな顔で僕を覗き込んだ。

そっぴや、そんな話したっけな・・・。

すっかり忘れていた僕は、もう開き直るしかなかった。

「大丈夫。もう治ったから。今日は美咲ちゃんと泳げるよ。」

小首を傾げて彼女は少しヘンな顔をした。

嘘だったのがバレバレだ。

「じゃ、何で、ヘンなこと言い出したんですか？」

まだ食いついてくる彼女に、面倒くさくなった僕は彼女の首に腕を回して抱き寄せた。

その耳元にこっそり囁く。

「ボディに自信がないからだよ。」

それは、当たらずしも遠からじな言い訳だった。

顔を真っ赤にして、彼女は僕を見つめる。

思い詰めた様に沈黙した後、彼女は口を開いた。

「あたし、そんなこと気にしません。ユウさんは、ユウさんだもの。あたしだって、自慢できるような体じゃないし・・・。大丈夫です。」

真剣に話す彼女に僕は好感を持った。

今の言葉を優が聞いたら、泣いて喜ぶだろうに。

素直ないい子なのはすぐに分かるんだ。

でも僕にとっては恋敵になるんだから、正直、複雑な心境だった。

海岸線上に軒を連ねる浜茶屋でビーチパラソルと敷物を借りて、僕は砂浜に陣を構えた。

生暖かい潮風がベタつと体をなでていく。

僕は暑さに耐えかね、シャツを脱いだ。

太陽が素肌に照り付け、これぞ夏！といった感じた。

気がつくと、彼女も着ていたワンピースを脱いで水着になっている。胸元に大きなりボンのついたピンクのストライプのワンピース。

彼女の真っ白な太腿が顕わになって、僕は少し眩暈がした。

優と全く違う本物の女の子の素肌を見て、経験値の低い僕はかなり動揺した。

僕の視線に気が付いて、彼女は慌ててバスタオルを巻きつける。何だか、僕がスケベな顔で見てたみたいで、ちよつと気まずい瞬間だった。

「あの、せつかくだし、まずは海に入りましょう？その方がお互い、恥ずかしくなくなるかも……。」

彼女の提案に僕は激しく同意した。

このまま二人で並んでいたら、鼻血が出そうだ。

僕は彼女の手を取って、波打ち際に足を入れた。

冷たい海水が膝までかかって、彼女は笑いながら飛びのいた。

ボンヤリ足をつけている僕にバチャつと水をかけられる。

僕も笑って水をかけ返す。

彼女の笑顔が弾けて、僕も自然と笑いがこぼれた。

優の大好きなシチュエーションだっただろう。

アイツ好みのベタベタバラードのPV撮影してるみたいな二人だった。

本当はこの僕の役を、あいつがやりたかったんだ。

そんな日が訪れることは、永遠にないのに。

二人でゆっくり泳ぎながら、彼女は楽しそうに話し出した。

「あたしね、ユウさんに会う前は本当に内気な子だったんですよ。友達だって全然いないんです。」

それは僕も優も負けてない。

交友関係の薄さには自信がある。

「僕もだよ。でも、ライブの時、よく一番前で見てたね。あんなトコで真っ直ぐ立ってたからビックリしたよ。」

僕は率直な感想を言った。

あの場所で微動だにせず突っ立ってた彼女は内気には見えなかった。

「あたし、ユウさんのギターに呼ばれた気がしたんです。」

彼女は真面目な口調で言った。

「呼ばれた？」

「はい。ユウさんのギターは泣いてるみたいで、誰かを探してるみたいでした。寂しくて悲しくて、誰かいないかって叫んでるみたいだったの。だから、あたし見てたんです。ここにいてよって……」

「

僕は彼女を凝視した。

女の勘ってヤツなんだろうか。

直感にしては、ユウの心理をズバリ付いたすごい洞察力だ。

僕が黙ったので、美咲ちゃんは恥ずかしそうに顔を赤らめて笑った。

「あ、変ですよ。メルヘン入っちゃって……。でも、あたし勝手に思っちゃったんです。ユウさんはきっと、あたしと同じ孤独感

を持った人だつて・・・。それを分かち合える人を探してるんだつて。」

・・・女つてすごい。

僕は何だかそら恐ろしくなって、彼女の無垢な顔を見つめた。

22話

海から上がった僕らは、砂の上に挿したままのパラソルの元に戻った。

バスタオルを僕に渡しながら、美咲ちゃんはパーカーを羽織って、弁当を出し始める。

アルミ箔で包んだおにぎりがカバンの中からコロコロ出てきた。

プラスチックの容器にはから揚げだの、タコさんウィンナーだの、女の子らしいおかずがかわいらしく入っている。

僕も料理の腕は自信があっただけど、女の子らしい細やかな感性は、彼女の方が上に思われた。

・・・当たり前か。

「どんどん食べて下さいね。早起きして作ったんですよ。」

彼女の笑顔に僕は思わず顔を緩めて、おにぎりを掴んだ。

敷物の上に胡坐をかいた僕の横に、彼女はちょこんと体操座りした。潮風におにぎりの海苔が良く合う。

僕らは打ち寄せる波を見つめながら、しばし、おにぎりにかぶりついていた。

「あの、聞いていいですか・・・？」

小さな声がして、僕はパーカーを被った彼女の頭を見下ろす。

「何？」

「・・・映画館でキスしてくれた時、あんたが好きだって言ってくれましたよね？」

僕はギョっとしておにぎりを喉に詰まらせた。

優のヤツ、そんなことまで言ってたのか・・・。
想定外のシナリオに僕は焦ったが、こうなったらアドリブで行くしかない。

「うん、言ったよ。あの時、美咲ちゃんが本当に好きだって思ったんだ。」

「じゃ、じゃあ・・・!」

彼女は僕の顔を見上げる。

その真剣な眼差しに、僕は嫌な予感がした。

「あたし、初めてのキスだったんです。もし、あれが遊びでなかったら、あたしの事好きなら、もう一回お願いしてもいいですか?」

・・・そうきたか。

僕は返答に困って、沈黙した。

いくら何でも、別人の僕がそれをするのはあまりにも失礼に思われた。

そもそも、優以外の人間とそういう行為をしたことがないんだから。ヘタクソだって思われたら、僕だって立ち直れない・・・。

「美咲ちゃん、それは僕から言おうと思ってたんだ。今日はまだ長いんだから、待ってて、ね?」

僕は彼女の肩を抱き寄せ、耳元で囁いてから、赤く染まった頬に軽くキスした。

我ながら、上手いじゃないか。

恋愛上級者レベルの対応だったに違いない。

彼女は僕の言葉に微笑んで、小さな声でハイと答えた。

優が見てたら羨ましがらうな。

いや、殺されるかもしれない。

こんな小さなときめきと幸せを、きつとあいつは切望してるんだ。
可哀相に。

今、僕に寄り添ってるこの子だって、優の正体を知ったら逃げていくに決まってるじゃないか。

美咲ちゃんが僕に好意を見せる程に、僕は優のことを思い出して暗い気持ちになった。

「ユウさんは、どうしてギター始めたんですか？」

再び、黙った僕を見つめて、彼女が話しかける。

これはまた、ハードルの高い質問だ。

何で、あいつはギターやってんだろ？

他の楽器でも良かっただろうに。

「ギターが実家にあつたからさ。」

僕は咄嗟に思いついた事を言ってみる。

でも、ありがちな話だ。

彼女はクスクス笑った。

「そつかあ、あたしも実家に母の嫁入り道具のピアノがあつたから、
習い始めたんですよ。どんな曲が好きですか？やっぱハードロック？」

それは知っている。

あいつはメタルでも、ロックでも何でもやるけど、本当に好きなのは
背中が痒くなるようなラブソングなんだ。

「バラードが好きだよ。Say Yes とか、You're th

e o n l y とか、バカみたいに聞いてたな。」

涙を浮かべて聞き入ってた優を思い出し、僕は言った。

「あ、あたしも大好きです。ユウさんてロマンティストなんですね。」

「そうだね。そう思うよ。」

・・・いつまでも二人このまま、強く抱きしめてFly Away・・・。

ベタベタな歌詞が頭に浮かんで、僕は背中が痒くなった。

お弁当も食べ終わった昼下がり、僕らは着替えて海水浴場を出た。日差しが強くなって、彼女の肌が焼けるのが可哀相だったからだ。すっかり打ち解けた彼女は、僕の腕にスルリと巻きついて笑顔を向ける。

本当に幸せそうだ。

女の子って、好きな男と一緒にいるだけで、こんなにかわいい顔するんだ。

このまま彼女が僕を見抜けなかった場合、僕は優に彼女のことを忘れるように言った。

と言う事はつまり、彼女が見抜いた場合、僕は退散。

優は失恋覚悟でカミングアウト。

見抜けなかった場合も、今日で最後という事になる。

勝手にこっちの都合で賭けのネタにされて、最終的にはお別れか。
僕は、とてつもなく失礼で酷いことを彼女にしている事に、今更ながら気が付いた。

何にも知らない彼女は、荷物をトランクに載せて次に僕がどこに行くのか、ワクワクして待っている。

願わくは、気付いてくれますように・・・。

僕は君の好きなユウじゃないんだ。

「ユウさん？どうしたの？」

苦虫を潰したような顔をしている僕を、小さな彼女が下から覗き込む。

僕は、その可愛らしい小さな顔を両手で包み込んだ。

彼女の顔が驚きと期待で硬直するのが分かった。

濡れた唇にそっと触れて、僕は少しかんで顔を近づける。

その時。

僕を見つめていた彼女の瞳に動揺が走った。

怯えたような、戸惑ったような表情で僕の手を捕らえて、震える声で言った。

「・・・あなた、本当にユウさんですか・・・？」

・・・何て言った？

僕は、そのまま凍りついた。

23話

美咲ちゃんは僕の手を取って、後ずさる。

その目に恐怖さえ浮かんでいるのが、僕にも分かった。

「み、美咲ちゃん、どうしたの？突然・・・。」

僕は必死で引きつった笑いを浮かべる。

近づこうとする僕を、彼女の両腕が押し返した。

「あなた、本当にユウさんですか？あたし、確か・・・。」

彼女は一人で喋りながら、眉間に皺を寄せて両手で頭を抱えた。

何かを必死で思い出そうとしている。

「な、何言ってるの？僕はユウだって・・・。」

「違います。・・・って言うか、あなたがユウさんなら、あの時の人が・・・。そうだ・・・。」

突如、ハットとした表情になって彼女は僕に詰め寄った。

「トイレでキスしてくれたユウさんがギタリストですよ。それが本当のユウさんじゃないんですか？」

僕は硬直したまま、沈黙を続けるしかなかった。

どうして分かったんだ？

外見は全く同じはずなのに。

でも、ここまで言われたら、もう観念するしかなかった。

「どうして、分かったの・・・？」

擦れた声で僕は聞いた。

彼女はもう一度、確認するように僕の両手を取って、自分の頬に当てる。

スリスリと、僕の掌を顔に滑らせてから、その手を僕に見せた。

「あの時、ユウさんの手に触ったの。ギター弾く人らしく指先だけ荒れてるなってすごく印象に残ってたんす。変な違和感はずっと感じてたんですけど、物的証拠がなくて……。今、あなたの掌の感触でやつとはつきりました。あなたはライブに出てたユウさんじゃないでしょう?」

言われて僕は自分の掌を見つめた。
そう言えば。

優が僕の体を撫で回す時、荒れた指先が気になった。
ギターの弦を押さえるから硬くなっちゃうんだって、アイツが言っていたことがあったような……。

僕はそんなこと全然気にも留めなかったから、すっかり忘れていた。

でも、そんな違いに気付くか、普通?

シャーロック・ホームズじゃないんだから。

「よく、気付いたね……。」

僕は半ば呆れて、溜息をついた。

彼女は真剣な顔で答える。

「言ったでしょ? あれはあたしの初めてのキスだったんです。全て覚えてるに決まっています!」

僕は苦笑して、両手を上げた。
完敗だ。

ギタリストのユウに惚れた彼女だから、気付いた事かもしれない。これは優の本質を好きになったって、解釈するべきだろう。

僕は今までの良心の呵責から解き放たれ、清々しい気分になった。

「案外、早くバレちゃったな。初めまして。僕は宮崎良。優の兄です。」

笑って挨拶した僕を彼女は呆気に取られて見つめていた。

スカイラインの助手席で彼女は黙って座っていた。

開け放した窓から潮風が入ってきて、彼女の長い髪がサラサラなびいている。

横目でそれを観察しながら、僕はギアを握り締める。

彼女が黙っているのが非常に気まずくて、握った掌に汗をかいていた。

「美咲ちゃん、怒ってる？」

「・・・いいえ。」

ムスっとした顔で彼女は答える。

うわあ・・・。

怒ってるよ、やっぱり。

でも、彼女にはその権利があり、僕はそれを受け止める責任があった。

「僕が来たのには理由があるんだ。でも、それは優から直接聞いて欲しい。」

「何の理由ですか？あたしのこと、からかってたんでしょ？顔が同

じだからってそんなことで遊ぶのは悪趣味です。」

正論を叩きつけられて、僕はうなだれる。

お怒りは尤もだ。

「美咲ちゃん、今から本物の優に会わせるよ。遊んでやった訳じゃないんだ。ただ、本物の優は僕以上に照れ屋で、デリケートで、感情が激しくて、凶暴で、しかも寂しがりで臆病なんだ。あいつのこ
と、分かってやって欲しい。」

僕の言葉に彼女はちよつとだけ、こっちを見た。

「ややこしい人ですね。」

「そう、複雑な人だよ、いろんな意味で。僕にもあいつの性格は把握し切れない。」

僕の言葉に彼女は少し、表情を和らげた。

「あたしを好きだって言ってくれたのはユウさんの方なんですよね？」

「そうだよ。あいつは君のことが好きなんだ。だから、理由はあいつに聞いて欲しい。できればあいつを受け入れてやって欲しいんだ。」

僕は前方を見ながら、車線変更する。

彼女を正視できなかった。

この台詞を口に出している今、僕は恋敵に優を譲り渡しているんだから。

「……理由って何ですか？どうして、そんなややこしい事したの？」

彼女は俯いて考え込む。

今、僕の口からは言えない。

自分は女ですって、優が言わなきゃ意味がない。

どうせなら、言った瞬間に玉砕して欲しい。

すぐに僕が慰めてあげれるように。

二人が始める前から、終わることを僕はシュミレーションしていた。

「ね、美咲ちゃん。優は少し変わった人だけど、本当に寂しがりなんだ。アイツ、今、美咲ちゃんに捧げるベタベタラブソング作ってるよ。できたら、ピアノでイントロ弾いて欲しいんだって、言ってた。」

優の伝言を伝えると、彼女は顔を上げて嬉しそうに微笑んだ。

24話

アパートの駐車場にスカイラインを止めて、僕は彼女をアパートに招いた。

ボロアパートの鉄筋非常階段を2階に登った一番奥が僕らの部屋だ。彼女はキョロキョロしながら、僕の後ろをトコトコ付いて来る・

太陽の沈み始めた西日がより強くなっていた。

時計を見ると、もう5時になっている。

優は部屋で待つてんのかな？

考えながらアパートのドアを触ると、鍵はかかっていなかった。軽くノックして僕はドアを開く。

「ただいま、優、いるか？」

狭い玄関で優を呼ぶと、襖が開く音がした。

バタバタ音を立てて、ギターを肩からぶら下げたまま、優が駆け寄って来た。

「あの、優・・・」

言いかけた僕の前に、優は両手をバツと出してバタバタ振った。

「言うな！聞きたくない！どうせ、ダメだったんだろ？考えたら、区別なんて付く訳ないじゃないか。こんなのデキレースだ。でも、いいよ。もう、この際何でもやってやる。俺流にやってみるよ。ナンならスカートだってTバックだって履いてやるよ。お前の好きなようにすればいい！」

「バカ・・・！何言っただよ。」

僕は、興奮して勝手にペラペラ話し出す優に飛び掛って、慌てて口を塞いだ。

彼女に聞かれたら大変だ。

もうこれ以上、話をややこしくしたくない。

口を塞がれたまま、優は切れ長の目を見開いた。

「心配するな。僕の負けだ。美咲ちゃんはお前を見てたよ。今、連れてきたから、後はお前が告白しろ。いいな。」

「連れてきたって、どこに・・・。」

その時、玄関のドアの隙間からヒョッコリ顔を出した彼女に気が付いて、優は絶句する。

全く同じ顔の僕たちが並んでるのを見て、彼女も驚愕の表情を浮かべた。

ドッペルゲンガー現象を見てしまったかのような顔だ。

優と美咲ちゃんはお互いの顔を見つめたまま、しばらく硬直していた。

やがて、美咲ちゃんがおずおずと口を開く。

「あの、本物のユウさんですか？」

彼女の問いに、優は小さな声で答えた。

「そう。俺が優です・・・。ごめん。」

その言葉に、彼女はこぼれる様な微笑みを浮かべた。

僕の仕事はここで終わりだ。

後は、優が自分でカミングアウトしてから告白する。

その後は、神のみぞ知ることになるだろうけど。

「僕は、レンタカー返しに行くから。ほら、コーヒーでも出してやって、二人で話しろよ。帰りはお前が送ってやれよ。」

まだ、固まっている優の肩を僕はポンと叩いた。

優は泣きそうな顔になって僕の顔を見る。

「ま、待てよ。二人きりになるのか？」

「そーだよ！これ以上、僕はタッチしない。僕の気持ちも考慮しろよ。」

置いていかれる子供のような情けない顔で、優は僕を見つめる。
でも、これ以上、僕が干渉できることはない。

僕は二人を残して、アパートを出た。

さっきの駐車場に戻って、スカイラインにエンジンをかける。

これから、どんな話し合いがされるのか。

彼女は優の全てを受け入れてくれるのか。

結果、優は僕から離れていくかもしれない。

辛いと言ったら嘘になる。

でも、見た限り、美咲ちゃんは本当にいい子で、不安定な優もしつ

かりした彼女になら甘えることができるんじゃないかと、少し期待した。

僕は結局、アイツの兄であり、あいつが幸せになるのが一番の望みなんだ。

僕がその相手でないことは、悲しかったけど。

僕は狂ってる。

自覚はあったし、それでも構わなかった。

もし、優を愛してくれる人が現われなかったら、僕は一生狂ったままアイツに付き合っていく。

・・・そのつもりだったんだけどな。

どうやら、役不足だったみたいだ。

目頭が熱くなって、僕は目をゴシゴシ擦った。

返す前に、この車で高速道路ブっ飛ばすか。

僕はクラッチを踏み込んで、ギアを握りしめた。

24話（後書き）

ここまで読んで頂いた方々、お疲れ様です。

明日から、第6章に入ります。

そろそろGL色を強めていきますので、ご期待下さいませ。

^*^

)*^

25話

ボタン、とあたしの後ろでドアが閉められる音がした。
本物のユウさんと向かい合って突っ立ったまま、あたしはその場に
取り残されてしまった。

どうして気が付かなかったんだろう。

今、目の前に立ってるユウさんは、さっきまでいたお兄さんとは明
らかに別人だった。

同じ構造の顔だけど、目つきや表情が違う。

警戒している野生動物みたいな、鋭いけど、怯えたような瞳。

ホンワカした雰囲気のお兄さんに比べて、ユウさんは刃物みたいな
鋭利な緊張感をあたしに与える。

・・・怖い。

正直、そう思った。

ユウさんは髪をかきあげて、グシャグシャ掻き混ぜた。

置いてかれた野良ネコみたいなあたしの処分に、困ってるみたいだ。

「あの、良かったら、入って。こんなところじゃナンだし。」

少し顔を赤くして、ぶっきらぼうに彼は言った。

初めてちゃんと聞いたその声は、まだ少年みたいな高いキレのある
声だった。

あたしは言われるままに、サンダルを脱いで部屋に上がった。

彼に誘導されるまま、玄関に直結しているキッチン兼リビングの小さなテーブルの席につく。

大学が幹旋したような、学生用のアパートに違いない。

お世辞にも、オシャレな部屋とは言い難かった。

キヨロキヨロ部屋の中を観察しているあたしの前に、ユウさんは缶ビールをドン、と置いた。

「ごめん、これしかない。あとは水道の水。コーヒーは作り方が分からない。」

「あ、水道の水でいいです。」

ビールなんてお店でしか飲んだ事ないあたしは、丁重にお断りした。あたしの答えに、ユウさんはまたキッチンに戻ると、マグカップに水道の水を入れて持ってきた。殺伐とした人だ。

あたしは、可笑しくなった。

ユウさんは小さなテーブルを挟んだあたしの向かいの席につく。

鋭い切れ長の瞳が、睨むようにあたしを見つめる。

中性的な綺麗な顔だ。

それは間違いなく、あたしがライブで見たギタリストだった。

「あの、ユウさん・・・」

「優でいいよ。みんなそう呼ぶから。さっきのは双子の兄の良。あいつに、ややこしい事させたのは俺だ。謝るよ。」

あたしは彼の顔を見つめた。

「ライブにいたのはあなた？」

「そう。その後、あんたと電話で話したのは良。」

「映画に行ったのは？」

「あれも良。その後、トイレで会ったのは俺。でも、あんたが引つ叩いたのは良。」

「朝、部室で会ったのは？」

「あれは俺。喋らない方が俺だよ。」

あたしは一連の顛末を思い出しながら、必死で頭を整理した。

眉間にしわ寄せて頭を抱えるあたしを、優さんは可笑しそうに見つめている。

あ、少し笑った。

中性的な美形が、女の人みたいな柔らかい表情になって、あたしは胸がときどきした。

「じゃ、あたしのこと好きだって言ってくれたのは？」

あたしは顔が火照ってくるのを感じながらも、優さんを直視した。優さんは、眩しそうに少し視線を泳がせる。

彼も照れてるのがよく分かった。

「アレは、俺。」

「じゃ、あの時、キスしてくれたのは・・・？」

畳み掛けるあたしに、優さんは完全に赤面して髪をかきあげた。

「それも俺。気に入らなかつたら謝るよ。ごめん。」

あたし達はお互い赤面したまま、沈黙した。

「あたし・・・、あの時、嬉しかったです。」

あたしは何とかそれだけ言った。

優さんは無言のまま、あたしの顔を見つめている。

そして、彼の左手があたしの頬に伸ばされた。

ザラつとした荒れた指の感触が、触れられた頬に感じられる。

ああ、これだ。

あたしが覚えていた、優さんの感触。

あたしは頬に当てられた左手を取って、握り締めた。

「美咲・・・って呼んでいいのかな？」

「は、はい。みんな、そう呼んでます。」

「じゃあ、美咲。俺、あんたに話さなきゃなんないことがある。」

再び、あたしの頬に手を添えて、優さんは顔を近付けた。

きれいな顔が至近距離に迫ってきて、あたしは動揺を隠せない。
ときどきも最高潮だ。

「な、何ですか？話って・・・。」

分かりやすいくらい期待しているあたしを見て、彼は笑って言った。

「あのさ、同性愛ってどう思う？」

「・・・は？」

このやり取り、前にもあったような・・・。

何で、いつもこの話をしたがるのか、あたしには分からない。

露骨に嫌な顔をしたあたしの顔を、優さんはそつとなでた。

左手の指先がザラつと頬に触れる。

話すのを躊躇するかのように、優さんは口を開いてから、唇を噛み

締めた。

「・・・あの、何で、いつもその話になっちゃうのか、意味が分かりません。どうして同性愛に拘るんですか？」

「素朴な疑問だな、確かに。」

真剣に問いかけるあたしの言葉に、優さんは苦笑した。

そしてあたしを真っ直ぐに見つめ直す。

切れ長の目が優しく細められて、あたしはその笑みに鼓動が速くなる。

その柔らかな微笑みのまま、彼は言った。

「・・・俺が、あんたと同じ女だって言ったら信じる？」

26話

あたしは、真面目な顔をしたまま硬直していた。

言われた意味がよく分からなかったからだ。

目の前にいる初恋の王子様が、あたしと同じ女ってことは、いくら何でもおかしい。

あたしの無反応ぶりを見て、彼は困った顔で髪をクシャクシャと掻き混ぜる。

「意味、分かったかな？俺、女なんだよ。あんたと同じ。」

女の人？

あたしと同じって言われたって、どこが同じなんだろう。

同じように見えるところは、全く見当たらない。

「あの、あたしには女の人には見えませんけど。」

真面目に答えるあたしを見て、彼はハハハと高らかに笑った。

そう言われれば、笑顔は女性的な気もする。

あたしは必死で、他の女性らしい所を探した。

「女に見えなくて光栄だけど、本当にそうなんだ。どうしたら信じてもらえる？見せようか？」

「は！？」

み、見せるって、なにを！？

笑いながら立ち上がる優さんを、あたしは必死で引き止めた。

「ちょ、ちょっと待って下さい！な、何で？女の人なのに、一人称が俺なんですか？」

あたしにすぎりつかれた優さんは、何とか椅子に座り直した。あたしの問いかけに、首を少し傾げる。

「・・・分かんない。子供の頃から気が付いたら俺って言ってた。男とばかり遊んでたからかな。」

「じゃ、何で男の子のカッコしてるんですか？」

「・・・別に？Tシャツとジーンズが好きなんだ。」

「な、何で・・・なんで、あたしの事、好きだって言ったの・・・？」

最後の問いに、彼は真面目な顔になった。

テーブルに向かい合ったあたしの手を取って、ギュッと握り締める。切ない悲しそうなその表情に、あたしの胸はまたドキドキした。

「ライブの時、あんたが俺の事見てて、すごく気になってた。次に会ったら絶対話しようと思って、二日目は電話番号書いたピックを用意しておいたんだ。また会えて俺、嬉しかった。」

彼の真剣な眼差しにあたしのドキドキは、どんどん加速していく。こんなにかっこいいのに、男の子じゃないなんてどういう事？

「で、でも、女の人なのに、女の子が好きなんですか？優さんってそういう人なの？」

「そういう人って言われたら、こういう人だって言うしかないんだけど。俺は女の子しか好きにならないんだ。でも、好きになる対象が女の子だけで、俺は自分が変だとは思っていない。あんたは？」

「あ、あたし？」

「俺が女じゃ、マズイ？このままの俺じゃダメかな？」

「ま、待って下さい・・・！」

何で？

そういう問題の前に、何か問題あるんじゃない？

女の子同士って、そんな特別な人達でしょ？

あたしは、今まで平凡で地味な人間だったし、そんな規格外のお友達なんていなかった。

あたしは、ただ、カッコいいギタリストの彼が好きになっちゃっただけののに。

どうしてこんな事になっちゃうんだろう？

「あ、あたし、分かりません。今までそんな人と会った事もないし、経験もないし。今まで地味で彼氏もいなかったのに、突然こんな・・・。それに、まだ、優さんが女だって、実感湧かないです・・・。」

あたしの煮え切らない態度に、優さんは少しイラ立った表情になった。

再び椅子から立ち上がると、あたしの腕をいきなり引っ張り上げた。急に引き寄せられたあたしは、そのままの勢いで優さんの胸に抱き締められる。

至近距離に彼の顔があつて、あたしは硬直したまま動けなくなった。

「・・・優さん？」

ドキドキしながら問いかけるあたしを抱き締めたまま、彼は信じられない行動に出た。

引っ張り上げたあたしの左手を、自分のＴシャツの中に下から突っ込んだのだ。

「・・・！な、何するんですか！？」

「信じられないんだろ？手っ取り早いから触ってみるよ。一応、少しはあるから・・・。」

彼の手に掴まれたあたしの掌は、想像以上に柔らかなその胸に押し当てられた。

確かにそれは、あたしもよく知っている感触だ。

その胸から鼓動がすごい速さで、掌に跳ね返ってくる。

「分かっただろ？俺は女だ。でも、あんたのことが好きなんだ。俺のこと気持ち悪くなかったら、付き合って欲しい。俺は・・・」

彼の顔が近づき、あたしの唇に、彼の唇が触れる。

きゃあああ・・・！

もうダメ・・・。

その時、あたしのドキドキも最高潮の域を完全に超えた。

あたしはそのまま、目の前が真っ白になって、足元から崩れ落ちた。

27話

目を覚ましたあたしは、ベッドの上に寝かされていた。朦朧とする記憶を手繰り寄せようと、あたしは目だけ動かして周りを観察する。

その視界に入ったきれいな横顔。

あたしは、全てを思い出してガバッと起き上がった。

傍らに頬杖をついていた優さんは、突然、飛び上がったあたしに少し驚いて後ずさる。

心配そうに首を傾げてあたしを見た後、表情を和らげた。

「良かった、気が付いて。あんまり起きなかつたら救急車呼ぼうかって考えてたんだ。大丈夫？」

もちろん、大丈夫だった。

あたしは首だけブンブン振って、元気をアピールした。やっとホットとした顔になって、優さんは笑みを見せる。

そうか、この人は女の人なんだっけ。

初めからそのつもりで見ると、今度は女性に見えるから不思議だ。先入観って恐ろしい。

あたしが勝手に男だって思い込んでただけで、彼は最初から女だったんだ。

でも、それが彼をキライになる理由に成り得るだろうか？誤解を与える風貌ではあるけれど、それは彼に責任はない。いや、彼女か。

優さんはベッドに座っているあたしに近づき、頬に手を伸ばした。その手がそつと首筋に下りてゆき、あたしの首の後ろに回される。

「びつくりさせてゴメン。でも、俺は早く返事が欲しいんだ。焦らされてから、最後にフられるのは何度されても辛い。俺のこと、ダメだったらもうハッキリ言っただけいい。受け入れがたい人が大多数なのは分かってる。ダメでも今なら、俺はどうも思わない。でも、もし俺のことが少しでも好きだったら、付き合っただけいい。普通の恋人みたいに。」

「あ、あたしでいいんでしょうか？あたしは普通の女の子ですけど。」
「オズオズとあたしは返事をする。」

「俺も普通だよ。普通の恋人みたいに付き合いたいんだ。それでも好きな女の子のために弾き語りするのが夢なんだ。」

そう言ってる間に、あたしは抱き寄せられた。女の人とは思えない、骨ばった強い腕があたしの首を支える。

「美咲、俺にチャンスを与えないか？俺はあんたに自分で作ったベタベタバラードを弾き語って、ピアノで伴奏して欲しい。そういう普通の恋人になって欲しいんだ。俺は普通だから。美咲のこと好きじゃダメかな？」

彼の切ない訴えをあたしは黙って受け止めていた。でも、その間にも彼の腕はあたしを抱き寄せ、唇はあたしの首筋を這っている。

くすぐったくて、あたしは彼の頭を両腕で抱きしめた。柔らかい、くせのある髪感触が気持ちいい。

じゃれてくる長毛の犬みたいだ。

「優さん、あたしまだ返事してないですけど・・・。」

「・・・せっかちなんだ。嫌ならやめるけど？」

「・・・いえ。」

あたしは、彼の頭をギュッと抱きしめる。

女の人だって分かってても、この人はユウさんだった。

最初に見た時の、クールで熱いギタリスト。

あたしは、この人にこうされるのをすごく待ち望んでいた。

子犬がじゃれるような愛撫の後、彼の舌があたしの唇を割って入ってきた。

呼吸ができなくなるくらいの乱暴なキス。

無意識によけたあたしの顔を、彼の手がまた捕らえる。

あたし達は激しくなる呼吸のまま、お互いの顔を見つめた。

「・・・ユウさん。」

「優って呼んで。俺だけ見て。俺と一緒にいて・・・！頼むから・・・。」

最後の方は懇願だった。

全身全霊をかけた願いだった。

この人は今までどんなに寂しい思いをしてきたんだろう。

あたしはこの人を受け止めることができるのだろうか。

そんな思いが頭をよぎった。

チャンスを与えて言っただって、もし、あたしの手に負えない人だったら？

あたしは、女の子同士で愛し合える人なんだろうか？

答えが出ない。

全てがあまりにも唐突過ぎた。

簡単に返事をしてから、この人を傷つけたくない。

あたしは、尚も体を押し付けてくる優さんをグッと腕で押し返した。

「・・・美咲？」

あからさまな落胆と絶望の表情。

この人を悲しませたくないのに・・・。

でも、あたしは言うしかなかった。

「ごめんなさい・・・！少し考えさせて。時間を下さい・・・。」

27話（後書き）

ここまで読んで下さった方々、お疲れ様です。
明日から最終章です。
もう少しお付き合い下さいね。

28話

またフラれた。

俺は今度こそ、立ち直る氣力がなくなった。

「時間を下さい……。」

彼女はそういった後、俺の腕をすり抜け、アパートを出て行った。カンカンカン・・・と、鉄筋の階段を下りていく足音がだんだん小さくなって、部屋は再び静寂になった。

分かってたじゃないか。

俺を愛してくれる人は、この世にはいないんだって。

こんなのいつものことだ。

ちよっとだけ期待しちゃったのは、彼女が別人だって見抜いたから、もしかして俺の本質を見てくれたのかと思ったからだ。でも、勘のいい人だったらすぐに氣が付いただけの話だ。

分かってたのに、涙が止まらなかった。

今度こそって思った期待の反動がデカ過ぎた。

そして彼女の小さな柔らかい体の感触。

抱きしめた俺の腕にまだ温かみが残ってるみたいだった。

今頃になってはつきり分かった。

俺はいつの間にか、本当に彼女のことが好きになっていたんだ。

さっきまで彼女が横になってたベッドに俺は倒れ込んだ。

くっそお・・・。

こんな姿、良には見られたくない。

でも、賭けには勝ったことになるのかな。

もうどうでもいい。

あいつがやりたいっていうなら、好きにさせてやる。

俺はもう全てがどうしても良くなってた。

髪を触られる感触に気付いて、俺は目を覚ました。

いつの間にか真っ暗になった部屋に差し込む月明かりに、俺の片割れが影みたいに照らされて俺の傍らに座っている。

見れば見る程、俺そっくりで気持ち悪い。

良は、黙って俺の髪をただ、なでていた。

ベッドで一人で泣き寝入りしてた俺を見れば、状況は一目瞭然だっただろう。

チクシヨー・・・。

カッコ悪。

俺は舌打ちして、良の手を軽く叩いた。

「いいよ、慰めなくて。慣れてるから。」

「・・・仕方ないよ。やっぱり普通の女の子には受け入れがたいのかもね。でも、優には僕がいるじゃん。」

「・・・るっせえ！お前じゃダメなんだよ。」

「贅沢言つなよ。もう妥協しろ。」

良は体を屈めて、俺の顔を探す。

うつ伏せで寝ていた体を仰向けにひっくり返すと、涙で濡れた俺の両腕を開いて押さえつけた。

月明かりに照らされた良の顔が、優しく微笑む。

俺が言うのもなんだけど、綺麗な顔だ。

優しい良の微笑みは、女神みたいに慈悲深い。

「僕は賭けに負けたんだけど、この結果はどう思う？」

「・・・想定内だよ。こうなると思った。」

良の掌は、仰向けに寝かされた俺の腹の上にピタリと当てられた。

その手が少しずつ移動して、俺の左の胸の上で止まる。

勝手に早くなる俺の鼓動を、良は楽しんで感じているに違いない。

「良、好きにしろよ。勝ったのか負けたのかよく分かんないけど、お前には迷惑かけた。それでも感謝してるよ。スカート持ってきたか？」

俺がそう言つと、良は黙って首を振って、笑った。

「僕はお前が嫌な事はしないよ。お前が僕にされたいって言つなら別だけど。たまには女の子みたいにされてみる？」

「・・・遠慮するよ。後戻りできなくなりそうだ。」

俺の答えに、左胸に当てられた良の手に力が入った。

敏感な部分を鷲掴みにされて、俺は顔をしかめる。

「・・・痛いよ。離せ。」

「戻るなら、女の子になれよ。本当はどうしたい？」

俺は良の手首を掴んで振り払った。

「何度も言わすな。お前には分からないだろうけど、俺は最初からこうなんだ。それに・・・俺はあの子が好きなんだよ。」

「じゃあ、今まで通りお前は男でいろよ。スカートは僕が履くから。」

「

良の提案に俺は思わず吹き出す。

ほっといたら、この兄は本当にやってしまいそうだ。

「お前って本当に狂ってるんだな。ばっかじゃねえの？」

「そう思われても構わないよ。お前の傍にいられるなら。」

顔を寄せてきた良を俺は受け入れた。

そつと唇が触れて、良は鳥が啄ばむ様なキスをする。

その優しい感触は、傷ついた俺の心に染み入った。

目頭が熱くなって、涙がぼろぼろ溢れ出す。

良は、舌でその涙を舐め取っていく。

「お前のこと好きになれたら楽だろうな。」

「だから、僕で我慢しろって。」

俺はこの病んでる兄の胸に顔を押し付けて、子供の頃みたいに泣き出した。

いつもの朝がきた。

コーヒーの香りで俺は目を覚ます。

台所で朝食の支度をしている良の後姿を俺はボンヤリ眺めた。

確かにスカートが似合いそうだ。

俺達が双子の姉妹だったらイケたかも・・・。

恐ろしい妄想が俺の頭を掠めて、俺は身震いした。

狂ってるのは一人だけで充分だ。

シャワーを浴びて席についた俺に、良はできたてのベーコンエッグを持ってくる。

片手にトレイを載せて、器用にテーブルに並べていく様子は新妻みたいだ。

「ねえ、優。もうすぐ夏休みだけど、どうする？実家に帰る？」

コーヒーを受け取りながら、俺はその言葉に首を傾げた。

そうだ。

来週から夏休みが始まる。

だけど、俺はその前にイベントがある。

多分、夏休みが始まる前の土曜日の夜だ。

俺は壁に貼ってあったカレンダーに目を走らせた。

「ごめん、良。俺、ライブがある。同じメンバーで、同じ場所で。」
「ええ〜！またやるの？」

俺の言葉に良は嫌な顔をした。

今回の件がよつぽどトラウマになったに違いない。

「この前のは夜店ライブ。今度は商店街主催の盆踊りライブだ。それが終わったら、帰るよ。」

「・・・何、そのローカルイベントのオンパレード。夜店の次は盆踊りかよ。」

俺も実は少しゲンナリしてはいた。

ドラムのショータ先輩のお父さんが商店街の会長で、先日のライブでビールがバカ売れしたのに味をしめて、もう一度やって欲しいと要請があったのだ。

そもそも、ショータ先輩の実家が商店街の中にある酒屋なんだから、ビールが出れば嬉しいに決まってる。

バブルが弾けてから不景気だし。

ショータ先輩も自分の学費を捻出するのに必死だ。

そうだ。

その時、また美咲に会えるかもしれない・・・。

突然、俺は思い出して、少し元気が出た。

俺の分かりやすい表情を見つめて、良は溜息をつく。

「優、美咲ちゃんにまたチャレンジするとか言うなよ。懲りただろ？」

「そんなことしないよ、今更・・・。」
良の言葉に俺は動揺する。

でも、俺はまだ懲りてなかった。

襖を開けて、俺は自分の部屋に入った。

自分の部屋に置きっ放しだった昨日作った曲が書いてあるノートをパラパラ捲る。

俺はギターをソフトケースに突っ込んで背中にリュックサックみたいに背負った。

「良、俺、先行くよ。軽音部でやることがある。」

良の返事も待たずに、俺はカバンを掴んでアパートを飛び出した。

29話

大学の1講目は9時スタートだ。

俺はそれを上回る8時に軽音部の部室に到着した。

誰もいない部室は、朝日を浴びてすごい熱気が部屋に充滿している。俺は窓を次々開け放った。

ギターをケースから引っぱり出して、プラグを繋ぐ。

性能の良くない古いアンプから歪んだ音が出た。

大まかにアウトラインのできていた曲に、ソロの部分を書き込む。

ここは圭介さんに弾いてもらわなければならないからだ。

弦を弾き、汗をかきながら音をとっていく。

その時、ボタン、とドアが開く音がした。

振り向くと、そこには今思い出していた圭介さんが立っていた。

「あれ？ユウ、最近早いじゃん？何してんの？」

いつもの端正な顔で爽やかに笑う。

あんだこそ、早いよ。

まだできてないのに。

俺の怪訝そうな顔を見て、圭介さんは両手を上げてウィンクした。相変わらず、外国かぶれしたキザな癖だ。

「怒るなよ。秘密なら誰にも言わないから。オレは荷物を置きにき

ただけだ。お前はここで何やってんだ？」

俺は渋々、書きかけのノートを見せた。

確かに、実際に弾く人に見てもらったほうが早い。

「何、これ？お前が書いたの？」

「そう。今度の盆踊りライブで演奏したいんだ。」

へえ〜と言いながら圭介さんは、歌を口ずさむ。

俺はドキドキして、彼の表情を観察した。

「なあ、すごいベタな歌詞だな。オレ好みだけど。」

圭介さんは笑った。

俺は慌てて、ノートを剥ぎ取った。

「この歌だけは、圭介さんにギターやって欲しいんだ。伴奏とソロパート、いい？」

圭介さんは笑みを浮かべたままキョトンとする。

「いいけど、お前ギターやらないの？」

「俺はエレアコ、そんでボーカル。」

「お前が歌うの？」

「そう。いいだろ？この曲だけ。」

あははと圭介さんは笑った。

「・・・何が可笑しいんですか？」

「だって、お前が喋ったのもあんまり聞いたことないのに。どんな声で歌うのか楽しみだと思ってさ。」

圭介さんに言葉に俺は慌てて口を押さえた。
そうだ。

自分の声がキラいな俺は必要最低限しか人と話したことがないのだ。
歌うってことは、俺が女だってバレちまう。
その覚悟も必要だってことだった。

圭介さんは悪戯っぽい顔で俺を見てから、俺の頭をクシャっとなでた。

「いいじゃん、俺がギターやるよ。かつこよくアレンジしてやる。
お前、女できたの？」

勘のいい彼の言葉に俺は返答に困って黙り込んだ。

その沈黙が答えみたいなものだ。

彼も意味深な笑みを浮かべたまま、それ以上は追求しなかった。

「・・・ライブが終わったら分かりますよ。圭介さんもびっくりしないです。」

俺は頭をペコっと下げて、部室を飛び出した。

気もそぞろに一日の講義が終了した。

俺は、ギターのケースを背負ったまま、今度は合唱部が練習をしている音楽室に向った。

言うまでも無い。

美咲に会う為だ。

音楽室は構内の中にあり、学部と関係ない俺は初めて足を踏み入れる場所だった。

階段を登って、踊り場まで来ると、アアアアアという定番の発声練習が聞こえてきた。

その声の伴奏はピアノの音だ。

美咲はそこにいるに違いない。

俺は二段飛びで階段を駆け上がった。

音楽室の前まで来て、俺はなるべく音を立てないようにそつと、ドアを開ける。

・・・つもりだったんだけど、老朽化している建物のドアはギイイと歯にくる音を立てた。

さっきのアアアアアの声が突然、止んだ。

俺がドアから顔を出しているのを、ピアノの前に並んだ20人くらいの女子大生達が一斉に振り返る。

「あ、軽音のコじゃない？」

「この前の夜店でギター弾いてたコ！」

「ユウ君だよ、ユウ君！」

「やだ、何しに来たの？」

キャピキャピした声で女の子達はざわめいた。

残念ながら、俺はその女の子達には興味がなかった。

ただ、一点を俺は見つめていた。

並んだ女子達の前に置かれたグランドピアノ。

そこに、小さな美咲が人形みたいにチヨコンと座っている。

俺がいることに気が付いた筈だ。

でも、美咲は顔を上げようとはしなかった。

顔を赤くしたまま、俯いてピアノの陰に隠れるように小さくなって

いる。

俺はそれを無理強いして、振り向かせたくはなかった。
その反応は俺の胸にはイタかったけど、そこは理性で耐えた。

「ちよつと、あんた！いつも部室で騒音立ててる男でしょ？ここに何の用なの？」

気が付くと、俺の前に小太りしたおかつぱ頭の女の子が立ち塞がっている。

俺が部室で弾いてると、「やかましい！」って怒鳴り込んでくる合唱部部长だ。

ウザイ奴が来ちまった。

俺は顔をしかめて舌打ちする。

「あ、ああ。久しぶりだね。部長さん、だっけ？」

「練習の邪魔よ！用件を言いなさいよ。」

お前に用はねえんだよ！

喉まで出かかった言葉を、俺は何とか飲み込んで笑顔を作った。

「フライヤー持って来ました。夏休み前日の土曜の夜、地元商店街の盆踊りでライブします！場所は夜店ライブと同じ商店街裏の公園。帰省する前には是非、盛り上がって下さい！」

ショータさんのお父さんが大量に印刷した商店街の広告を、俺は最高の笑顔でかわいくない部長に渡す。

渡すついでに、部長の手をそつと握ってやると、完全に俺を男だと思っている彼女は真っ赤になって印刷物を奪い取った。

「よ、用件は分かりました。つまり、ライブの宣伝に来たってこと？」

「そうです。良かったら部長も来てよ。圭介さんはアンタのために歌うって言うてたよ。」

「……え！」

俺はテキトーな事を言っ、ピアノの向こうの彼女を見つめた。
俺を見ていたらしい彼女は、目が合うと慌てて下を向いた。

用件は分かっただろう。

美咲、俺はあんたの為に歌うから。

思いが通じるように、俺は彼女をひたすら見つめていた。

30話

前期試験も終わり、ライブを明日に控えた俺達は軽音部の部室に集まって最後の音合わせをしていた。

この時期になると授業がないヤツはさつさと里帰りしてしまう。学生が多いこの街はゴーストタウン化するのだ。

かく言う俺も、このライブが終わったら良と一緒に実家に帰ることになっていた。

たまに帰ると、親は初日は手厚くもてなしてくれる。

だけど、だんだん扱いが粗末になり、こき使われ始めて、一週間後にはケンカしてまた下宿に戻るのがお決まりのパターンだった。

実家と言っても、隣の愛知県の北部だから東名高速で帰れば2時間くらいなもんだ。

そつえば美咲はどこから来てるんだろう。

もしかして帰省してないだろうか・・・？

基本的なことを俺は今更思い出した。

でも、部室まで宣伝に行ったんだ。

もし彼女がライブに現われなかったら、俺はそれを答えと受け止めるしかない。

「じゃあ、ユウが今回ボーカルやるっていう曲、やってみる？」

圭介さんの声に俺はハッと我に返る。

彼はピックを口に咥えて、チューニングしながら俺を見てウィンクした。

本当は本番まで歌いたくなかったんだけど、合わせておかないとマズイ。

仕方なく、俺は立ち上がった。

「お前、歌えんの？」

ベースの先輩が心底驚いた顔をして、俺を見る。

歌えるさ。

少なくとも、高音は小野正利より出る。

女なんだから。

俺のエレアコで入るイントロ。

ここは本当は美咲のピアノで弾いて欲しかった。

俺は、ベタな歌詞を歌い始める。

その途端に、メンバーの表情が変わった。

何とか途切れないように演奏は続けているものの驚愕の表情で歌っている俺を見ている。

面白いほど分かりやすいメンバーのリアクションに、俺は苦笑する。歌ったらかうなるのは想定内だった。

歌う時の俺の声は実は高い。

それも、完全に女声ソプラノ。

それが嫌で、なるべく人と話す時は低い声を出すようにしていたんだ。

約束通りの圭介さんアレンジの感動的なソロギターが入った後、最後にサビを歌って曲は終わった。

一同、シーンとなって俺を囲む。

やがて、圭介さんが禁忌を犯すかのような緊張した面持ちで口を開いた。

「・・・お前って、もしかして女？」

返事の代わりに、俺はニヤッといつもの悪そうな顔をして見せた。

一通りの打ち合わせをしてから、俺はアパートに帰った。

街はすっかり暗くなって、熱い空気が立ち込めている。

また熱帯夜だ。

アパートの前に見覚えのない車が止まっているのに俺は気が付いた。
ワインレッドのスカイライン。

ヤンキーが乗るようなタイプのだ。

そのドアが突然中から開いて、良が低い車体から体を屈めて出てきた。

「おかえり。明日、ライブが終わったら小牧に帰るだろ？車、レンタしてきた。」

「・・・それがスカイラインかよ。何だよ、このヤンキーみたいな
の。」

そうなんだ。

軟弱な見かけによらず、こいつは意外に車好きで暴走族だった。

俺から言わすと、趣味の悪いヤンキー仕様車ばかり乗りたがる。

「いいじゃん。どうせ同じお金出して借りるならカッコいい方がいいだろ？向こうのニッサンレンタカーでそのまま返せるし。」

「これがカッコイイと思ってんのか？電車で帰ればいいだろ、もったいない。」

俺の言葉に良は不機嫌そうに反論する。

「お前の荷物持つのはもう嫌なんだ。自分で持ったことないクセにもったいないのは僕の体力だよ。」

ブツブツ言ってる良に、俺はフライヤーとは名ばかりの、商店街の広告を渡す。

良はキョトンとしてそれを受け取り、目を走らせるとゲンナリした顔になった。

「これが盆踊りライブのチラシってこと？」

「そう。お前も来いよ。今回、俺も歌うから。」

俺の言葉に良は青くなった。

「お前が歌うの？歌ったらさすがにバレると思うけど、いいのか？」

「いい。何か、隠れて生きていくのにも疲れた。俺のカミングアウトと引き換えにバラード歌って、彼女が応えてくれなかったら諦めるよ。」

「・・・諦めてなかったんだね。」

良は溜息を付きながらも、笑みを見せた。

「いいじゃん、お前がやりたいようにやれよ。最終的には僕がいるから、安心してフラれていいよ。お前が男でも、女でも、僕はお前の味方だからさ。でも、一応、応援してるよ。」

俺は良の優しい答えに少し感動した。

本当に、こいつを好きになれたらどんなに楽だろう。

「じゃ、見に来てくれる？」

「行くよ。頑張れよ、優。」

俺と同じ顔で、良は無邪気に笑った。

31話

僕が洗濯物を片付け出す頃、優はギターケースを抱えて出て行った。こんな場面、以前もあつたな。

デジャブーみたいだ。

考えたら、夜店ライブから1月も経ってないんだ。

僕は時計を見ながら、畳んだ洗濯物を大きめバッグに詰め込んでいく。

ライブまでまだ少し時間があつた。

バッグに詰めているのは、明日からの里帰りの準備だ。

僕はライブが終わったら、その足で実家に優を連れて帰るつもりでいた。

彼女は来ないんじゃないかと、実は僕は思っていた。

優は普通じゃないから分からないだろうけど、一般の人が同性愛を受け入れるのはやっぱり難しい。

ダメなものはダメなんだ。

理屈じゃなくて。

例えば、僕が男を愛せるかと聞かれたら、返事は速攻でノーだ。

どんなにいいヤツでも、男が相手じゃ無理なんだ。

彼女はただ、ノーマルだったんだ。

それ以上でも、それ以下でもない。

悪気はないし、彼女に非もない。

優には気の毒だけど。

駐車場のスカイラインの狭いトランクに、帰省の荷物を押し込み、僕は時計を見た。

現在、時刻は6時。

ライブが始まるのは確か7時だから、まだ余裕がある。

ライブ終了後は盆踊り大会に突入らしい。

その後、車で高速乗って2時間もあれば実家だ。

そろそろ出かけて、ライブ見てから帰るか。

その時、部屋から電話の鳴る音が聞こえた。

駐車場にいた僕は、その音を聞いて慌てて階段を駆け上がり、部屋の電話に飛びつく。

「もしもし？宮崎ですが。」

「・・・良？俺・・・。」

聞きなれた声がして、僕は受話器をギョっとして見つめた。
もうライブの準備してる頃だろうに、どこから電話してるんだ？

「何だよ、どこにいる？忘れ物でもしたのか？」

「良、俺、今日弾けない・・・。」

「はあ？」

受話器から死にそうな優の声が聞こえる。
僕はさすがに慌てて、受話器を握り直す。

「何言ってるんだよ。迷惑かかるだろ？何があった？」

しばらく、沈黙した後、優の涙声が聞こえた。

「今、公園に合唱部の女の子達がみんな来てるんだ。そこに、美咲だけいなくて……。部長の話だと、彼女、今夜、実家に帰るんだって……。今頃、駅に向ってるだろうって……。」

僕は愕然とした。

この展開は僕も想定外だった。

ライブが始まる前から、彼女の答えが分かっちゃったってことが……。

「優、落ち着け。」

「だって、俺、ここにいる意味ないじゃん。もう、弾くのめんどくさい。彼女がいないんだから、俺がバラード歌う必要はなくなった訳だしさ。」

自嘲的に笑う声は、泣き笑いだった。

僕は今すぐ、優を抱き締めたかった。

そうしないと、あいつは本当に壊れてしまう。

でもその時、ぼくの頭に考えが浮かんだ。

「優、彼女は今夜の電車で帰るって事か？」

「知らねえよ。ただ、駅に向ってるって言うてた。」

「彼女の実家どこだよ？」

「知らねえったら……。でも、関東方面じゃね？関西弁じゃなかったし……。」

僕は冷蔵庫に張ってある新幹線のダイヤを見た。

今頃駅に向ってるとしたら、東京方面の新幹線は、19:00発だ。

駅で待ち伏せすれば、会えるかもしれない。

僕は受話器に向って怒鳴った。

「優、とにかくライブは出る。僕が必ず、彼女を連れてくから。いいな！」

優の返事も待たずに、電話を切ると、僕は非常階段を駆け下りた。駐車場に荷物を積んで止まっているスカイラインの低い車内に入って、エンジンをかけるとドオッとマフラーから爆音がした。

レンタルにしてはいい音だ。

クラッチを踏み込み、ギアを入れる。

スカイラインは、すごい勢いで駐車場を飛び出した。

駅前は土曜の夕暮れ時という最悪の時間帯のため、混雑していた。せつかくのスカイラインも渋滞相手じゃ、意味が無い。

無駄に排気しながら、僕は渋滞の中でイライラしていた。

駅に向ってるとっていう情報だけじゃ、会える確立は少ないだろう。でも、彼女が東京方面の新幹線に乗るつもりなら、会える場所は一箇所だけある。

新幹線の東京方面のプラットホームだ。

ダラダラと走りながら、車はやっと駅前に出た。公共の立体駐車場に車を止めて、僕は新幹線のプラットホームに向かって走り出す。

駅の中は帰路につく人でごった返していた。

この中から美咲ちゃんを探し出すのは不可能だ。

僕は時計を見ながら、切符売り場をウロウロしていた。

既に6時半を回っている。

今すぐ、見つけたとしてもライブが始まる7時には絶対間に合いそうも無い。

あいつが終盤に歌えば、何とかギリってところか。

僕はビン底メガネを押さえて、駅の中を観察した。

その時。

奇跡は起った。

みどりの窓口から出てきた、白いレースのワンピースに麦藁帽子の女の子が僕の視界に入った。

大きな旅行カバンの中に切符を入れようと、みどりの窓口の前で立ち止まった彼女を見た時、僕は猛ダッシュしていた。

「美咲ちゃん！待って！」

突然、現われた僕に彼女は幽霊でも見たような、驚きと恐れ表情をした。

息を切らせながら、これ以上逃げられないように、僕は彼女の腕を掴む。

「・・・ユウさん？」

「じゃない！僕は良だ。美咲ちゃん、ライブ見に行かないのか？優は君が来るのを待ってるんだ。」

僕の問いに彼女は少し視線を泳がせる。

困っているのは一目瞭然だ。

「・・・あたし、ユウさん好きです。でも、そんなに簡単に答えが出せる問題じゃないんです。あたしはユウさんに時間を下さいって言ったのに、何でもかんでも、一人で決めて・・・強引よ。あたしの気持ちなんか、考えてくれないんだわ。」

彼女は悲しそうに呟いた。

そう言われれば、その通りだ。

あいつは基本的に人のことをあんまり考えない。

でも、それは愛されたいと願うあまりに形振り構ってられなくなるからなんだ。

「・・・美咲ちゃん、でも、それが優なんだ。君は優のギターに呼ばれたって言ったよね？その通りだ。あいつはいつも誰かを探してる。自分を受け入れてくれる人を探して、愛情に飢えてるんだ。だから、お願いだ。あいつにチャンスをあげてくれないか？その結果、ダメなら仕方が無いけど、始まる前から偏見で断われたら、あいつが可哀相だ。」

僕の必死の懇願に彼女の顔が赤く染まった。
涙で潤んできた目で僕をキッと睨みつける。

「良さんには分からないわ。あたしだってユウさんのこと好きです。でも、あたしは普通の地味な女の子で、今まで恋人なんていなかったのに、好きになった人が女の人だったなんて・・・。良さんの言う、やっぱりダメだった時に彼を傷つけるのが怖い。あたしは彼の背負ってるものを全部受け止める自信がないのよ。」

僕は彼女の言いたい事が痛いほど分かった。

普通の女の子の正しい見解だろう。

でも、今日ばかりは引き下がる訳にはいかなかった。

「美咲ちゃん、君の言い分はすごく分かるんだけど、あいつは全然特別な人間じゃない。むしろ、我儘でだらしない普通の人だ。ギタ―だって才能があるわけじゃない、負けないように必死で練習してたんだ。美咲ちゃんと同じ普通の人なんだよ。だから、頼む！あいつが歌うのだけ聞いてから、決めてくれないか？あいつは今、君が来るのを待ってる。」

「・・・あたしを待ってる？どうしてあたしなんかのこと、想ってくれるの？」

「それは、君があいつが呼んでるのに気付いたからじゃないかな？君も誰かを探してたんじゃないの？」

彼女は黙って僕の顔を見た。

そして、意を決した顔で言った。

「あたし、行きます。彼のところに連れてって・・・！」

31話（後書き）

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございます。
明日、最終回です。
もう少しお付き合い下さい。

32話

僕と美咲ちゃんを乗せたスカイラインは、爆音を立てて駅前の大通りを走り抜けた。

さっきまでの渋滞は少し緩和されていた。

既に時刻は7時になっている。

ライブはもう始まつてる筈だ。

何とか、間に合ってくれよ。

僕はギアを5速に入れて車線変更を繰り返す。

美咲ちゃんは終始無言でシートベルトを握り締めていた。

「・・・聞いていいですか？」

突然の彼女の声に、僕は目だけで動かして彼女の横顔を見る。

「何？」

「良さんはどうして、そんなに必死になってくれるの？お兄さんだからですか？」

彼女の問いに僕は黙り込む。

確かに普通の兄弟だったら、兄がここまで介入するのは不自然だろう。

僕が優のことが好きで、肉体関係を持つてると言ったら、ドン引きだろうな。

「お兄さんだから、だよ。あいつとは生まれる前からの付き合いだからね。」

僕は無難な返事をして笑った。

確かに、恋敵を応援している自分はずまらない役柄だ。

結果、一人になるのは僕なのにな。

でも、僕は覚悟はできていた。

マイノリティのくせに、自覚も覚悟もない優の代わりに僕はいつも心に誓ってたんだ。

あいつを見守る為に、僕は一人で生きていく。

あいつが一人になった時に、いつでも傍にいられるように。

・・・やっぱり、僕は狂ってるかな？

それでもいい。

今は、優が幸せになってくれれば。

国道に入ったスカイランは爆音を上げて、ノロノロ走っている車を次々を抜き去っていった。

やがて、国道から細い道に入り、宅地を抜けるとライブ会場の公園が見えた。

商店街とは逆方向から来た事になる。

歩く時間がショートカットできた。

僕は公園のガードレールに車を横付けして、公園の中に入った。車を降りた途端に聞こえるノリのいいロック。

ドラムの音が腹に響いてくる。

良かった。

取り合えず、ライブは始まっている。

今聞こえてくるギターも優が弾いてるに違いない。

奥に進むにつれて密集度を高める人の波の中を、僕は美咲ちゃんの手を引いて逆走する。

最前列まで僕らはなんとか辿りついた。

先日と同じように、盆踊りの櫓の上に彼らはいた。

センターで派手なギターを見せる長身の茶髪のモテ男。

その後ろに、微動だにせずギターを弾く優が見えた。

無表情でギターを睨んでいる優は、いつもと変わらないように見えたけど、僕は折れそうなあいつの心を想って切なくなった。

やがて、曲が終わり茶髪男がMCを始めた。

「最後の曲です。今日はオレがボーカルの座を譲って、ウチのギターリストのユウが心を込めて歌います。曲はMy Dear」

モテ男はそう言って後ろに下がったが、肝心のユウが前に出て来ない。

どうやら出たくなってゴネてるみたいだ。

モテ男とユウは何やら小さな声で口論していたが、モテ男の長い足にお尻を蹴られて、ユウは渋々前に出てきた。

マイクの前でギターを握り締めて、優は不安げな表情でぐるりと会場を見渡す。

こんなに自信なさげで心細そうな優を見たのは初めてだった。

観客も、マイクの前で突っ立っている優の不安を感じ取ってざわめき始める。

僕は、思わず大声で叫んだ。

「優！僕らはここだ！早く歌えよ！」

「ユウさん！歌って！」

続いて叫んだ美咲ちゃんに、僕はギョっとして振り返る。

気が付いたら今まで僕の後ろに隠れるようにしていた美咲ちゃんが、最前列から一歩出た所で立ち尽くしている。

初めて彼女が優に出会った時と同じように。

彼女にも聞こえたのかな。

優の悲鳴が。

僕は何だかすごく嬉しくなつて、ステージの上の優を見た。

美咲ちゃんに気が付いた優は、喻えようもない穏やかな顔で笑った。心から安堵したその顔は、あどけない子供みたいで、慈悲深い女神みみたいだ。

やっと自分を取り戻した優は、ギターのネックを握り締めて、マイクに向う。

「ユウです。今日、初めて大事な人の為に歌います。」

意味深なMCに、会場の女の子達がざわめく。

でも、そんなことは優の耳にはもう届いてなかっただろう。

優は櫓の真下で、自分を見上げている小さな女の子だけを見つめていた。

柔らかいアコースティックギターのイントロが始まり、優が歌い始める。

会場は優の声に少しざわめいたが、そのうち口を開く者はいなくな

った。

圧倒的な歌唱力だった。

幅広い音域。

伸びやかなよく通る声。

それは、疑いもなく女性の声。

空から降ってくる女神のような声だった。

優が歌ったのは初めて聞いた。

その切ない歌声とギターの音色に僕の瞼が熱くなってくる。
まさに全身全霊で、誰かを呼んでいる叫びのような歌声だ。

美咲ちゃんは微動だにせず、優を見つめている。

瞬きひとつせず、優の全てを受け止めようと必死で見つめている。

やがて曲は中盤にさしかかり、さっきのモテ男が前に出てきてソロ
パートを弾き始めた。

こっちも見事なテクだ。

ギターが泣き叫ぶような旋律に僕は鳥肌が立った。

その時。

マイクを握り締めて立っていた優が、突然、怒鳴った。

「美咲い！好きだあああ！」

美咲ちゃんの周りにいた観客は、一斉に彼女に注目した。
大衆のド真ん中で大声で告白された美咲ちゃんは、顔を真っ赤にし

ながらも、その場から動かなかった。

僕にはそれが、彼女が優の思いを受け止めてくれたように見えた。

モテ男のソロパートが終わって、優が再びマイクを持った。

真っ直ぐに美咲ちゃんを見詰めながら、優は自作のベタベタバラードを最後まで歌い切ったのだ。

観客から大きな拍手が起こった。

優は恥ずかしそうに笑みを見せると、ペコッと頭を下げる。

そのまま前に進み出ると、ピョンとジャンプして櫓の下に飛び降りた。

美咲ちゃんの目の前まで優はゆっくり歩み寄った。

そして、笑って握り締めた右手を彼女の前に差し出す。

美咲ちゃんも微笑んで、優の手を握り締めた。

その掌に、さっきまで弦を弾いていたピックが渡されたのを僕は見逃さなかった。

その時、茶髪のもて男がマイクに向って怒鳴った。

「では、ラストの曲行きます！オレはここにいる全ての女性の為に歌うから、ご心配なく！夏が終わっても商店街をよろしく！TAB O O、行くぜ！」

モテ男は愉快そうに笑いながら、優にウィンクした。

優は慌てて櫓の上によじ登る。

熱い夏に良く似合うハードロックが、大音量で夕闇をつんざく。

熱狂する人の群れを掻き分けて、美咲ちゃんは僕のところまで引き返して来た。

恥ずかしそうに微笑みながら、掌に握られていたピックを僕に見せる。

真っ白い、大きめの三角ピックには、汚い字でこう書いてあった。

- 好きだ チャンスくれ! -

僕は苦笑する。

優らしい直球メッセージだ。

「どうする？美咲ちゃん。」

僕の問いに彼女は笑って言った。

「こんなのずるいですよね。カッコ良過ぎ。悔しいけど、もっと好きになっちゃいました。」

ステージの優が僕らを見つけて、ニヤッと笑った。

いつもの悪そうな顔で、自信に満ち溢れている。

探していた女の子が自分を受け入れてくれたことを、もう知っているに違いない。

誰にも負けない優の高速ギターが、夕闇を切り裂いて響き渡る。

熱くてクールな僕の片割れ。

激しくて、脆くて、どうしようもない我儘な僕の妹。

彼女が歩くであろう前途多難な道を、僕はこれからも追って行くだろう。

失われた半ピースを取り戻すかのように。

ステージで一番輝いている優を、僕はいつまでも見守っていた。

F i n .

32話（後書き）

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございました。
またどこかでお会いしましょう。

（^^）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2860u/>

Gemini

2011年9月25日14時04分発行